

財団法人 中国四国酪農大^学校創立40周年記念

40年のあゆみ



平成18年3月

財団法人 中国四国酪農大^学校

財団法人 中国四国酪農大^学校同窓会

学校全景



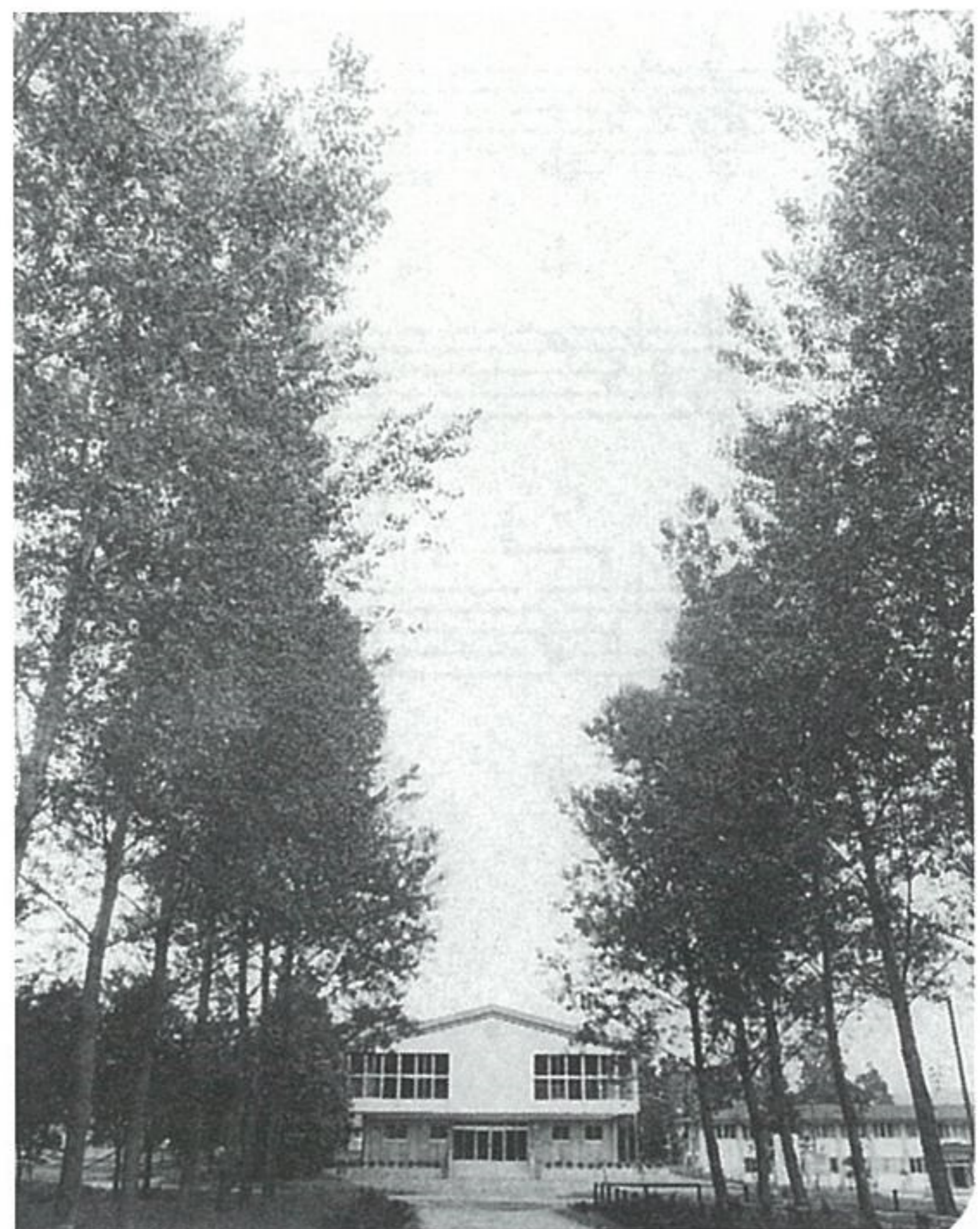
西茅部本校（昭和39年）



三木ヶ原牧場



本館
（昭和39年）



本館より体育館をみる（昭和53年）



第1牧場搾乳舎
（昭和50年）

学校全景



第二牧場（平成17年）



冬景色 学生寮（平成8年）



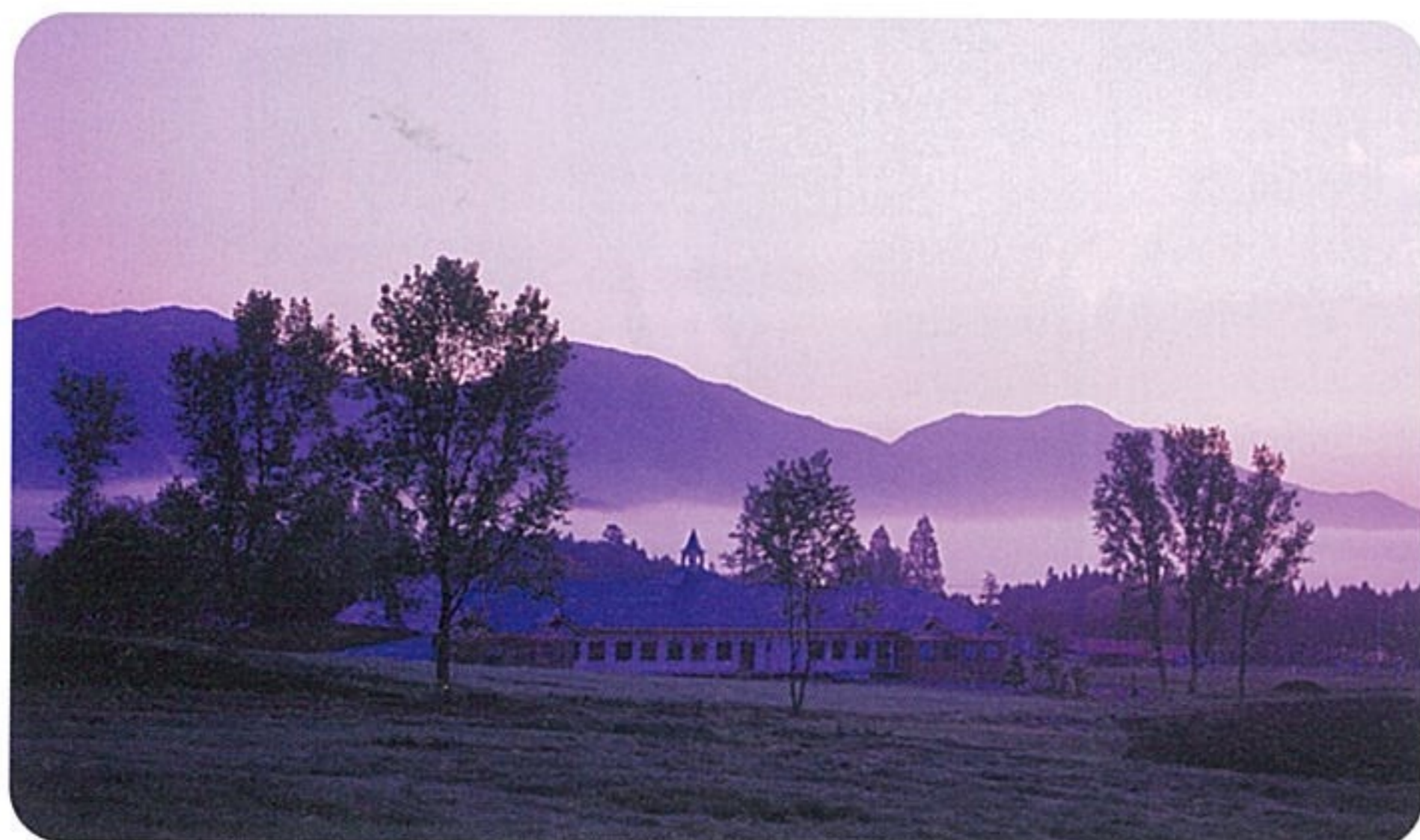
旧本館（平成7年）



桜の本館（平成8年）



冬景色（平成9年）



朝焼けの本館（平成10年）



第2牧場旧牛舎（平成9年）

酪農大学の一年



4月 第一牧場と桜



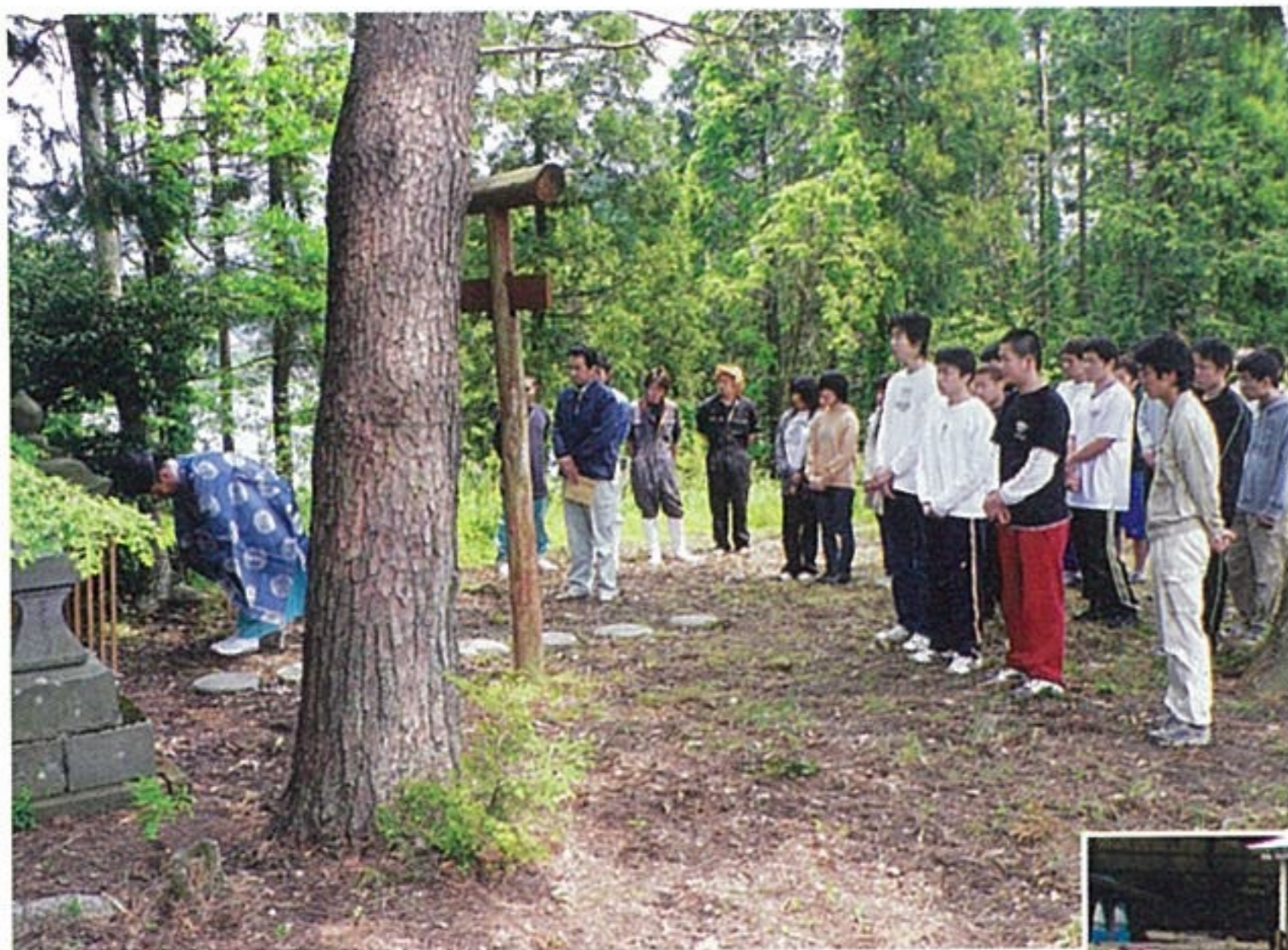
4月 白樺植樹



4月 初放牧



5月 蒜山登山



5月 畜魂祭



6月 動態調査



6月 第一牧場牧草刈り取り



6月 審査演習



7月 トラクター免許練習



8月 オープンスクール



9月 地区共進会



9月 デントコーン刈り取り



10月 トラクター牽引練習



11月 削蹄演習



2月 テーブルマナー



2月 岡山農大スキー交流会

目 次

1	ご挨拶	財団法人中国四国酪農大学校 理事長	藤原 師仁	1
		財団法人中国四国酪農大学校同窓会 会長	筒井 一	2
2	祝 辞	農林水産省中国四国農政局 局長	鮫島 信行	3
		真庭市 市長	井手紘一郎	4
3	40周年に寄せて	岡山大学教授	横溝 功	5
		鳥取大学名誉教授	尾崎 繁	6
		おかやま酪農業協同組合 代表理事組合長	山崎 博文	7
4	「創立40周年を迎えて」	財団法人中国四国酪農大学校 校長	有富 敬典	8
5	現役員名簿			9
6	歴代校長、副校長			10
7	卒業生寄稿	岡山県新見市（県立1期）	柴田 卓志	12
	「学校での思い出」他	岡山県岡山市（県立2期）	千葉 靖代	13
		鹿児島県熊毛郡中種子町（県立3期）	野田 健	13
		岡山県勝田郡奈義町（財12期）	小童谷則夫	15
		岡山県高梁市（財16期）	上森 勝美	17
		岡山県新見市（財27期）	大隅 精二	17
		岡山県加賀郡吉備中央町（財29期）	難波 正憲	18
		三重県鈴鹿市（財30期）	瓜生 由美	19
		岡山県加賀郡吉備中央町（財32期）	孝本 真二	20
		大阪府池田市（財33期）	垂谷 太一	21
		岡山県真庭市（財34期）	美甘 正平	22
		山口県下関市（財36期）	安倉 可奈	23
		茨城県水戸市（財37期）	長田 重信	24
8	旧職員寄稿	岡山県農林漁業担い手育成財団	古好 秀男	25
	「酪農大学校とともに」他	岡山県農林水産部畜産課	柴田 範彦	26
		岡山県備中県民局新見支局	中山 敏之	27
		岡山県津山家畜保健衛生所	権代 将人	29

9	在校生寄稿 「酪農大学校に入学して」	(財) 中国四国酪農大学校一年生 同 同 同	小幡 農志 31 三宅由美菜 32 尾崎 直幸 33 森山 夏季 34
10	酪農大学校の沿革		35
11	写真でつづる酪農大学校の40年		39
12	研修農家寄稿 「研修生を受け入れて」	島根県太田市 岡山県岡山市	住田 益三 46 松崎まり子 48
13	校外講師名簿		49
14	学科担当講師名簿		50
15	現職員名簿・写真		52
16	旧職員名簿		53
17	出身県別卒業生、在校生の状況		60
18	卒業生進路状況		61
19	卒業生名簿		62
20	在校生名簿		74
21	編集後記		75

ご 挨拶

財団法人 中国四国酪農大学校

理事長 藤原 師 仁



財団法人中国四国酪農大学校は、昭和40年11月に雄大な蒜山三座を望む蒜山高原に創立し、今年で40周年を迎えました。ここに、長年にわたって本校の育成強化にご尽力賜りました関係各位に対しまして深甚なる謝意を表する次第であります。

この40年の間に991名の卒業生がこの地を巣立っていき、多くが地域の中核的な酪農後継者として、また酪農ヘルパーを始め畜産関係団体等に従事し活躍しておりますことは大変喜ばしいことであります。

施設の充実が進むなかで、平成7年に完成した本館には、AVルーム、情報処理室、ハイテク実習室、乳肉加工施設等の新しい機能を備えた施設を完備し、21世紀に向けた教育内容の充実強化を図り、酪農に関する広範な知識と豊かな創造力、たくましい実践力を持った後継者の養成を行っているところであります。

また本年度には、最先端技術を備えた搾乳牛舎等の時代に即した魅力ある施設を整備することとしております。

近年の酪農を取り巻く情勢は、平成12年の乳業メーカーによる食中毒事件、平13年のBSE（牛海綿状脳症）問題や食肉の偽装表示事件などが社会不安をもたらし、消費者の生活を脅かしたことは記憶に新しいところであります。

こうしたなか、本校といたしましては、時代の要請に対応した企業的酪農経営に関する知識と技術、国際化や情報化の進展に適切に対応し、国際競争力を兼ね備えた地域のリーダー的後継者の人材養成に懸命に取り組んでいるところであります。

今後とも、職員一丸となって優秀な酪農後継者を養成して参りますので、関係各位の変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りますよう心からお願い申し上げましてご挨拶といたします。

御 挨拶

財団法人 中国四国酪農大学校同窓会
会 長 筒 井 一



この度、我が母校 財団法人中国四国酪農大学校が、創立40周年を迎えるに当たり、記念誌を発行する運びとなりました。

同窓会と致しまして、この慶事に協賛する事として、多くの会員の皆様から思い出を綴った寄稿を頂きました。ご協力頂いた方々にお礼申し上げます。また、関係者各位のご協力に対し感謝申し上げます。

本同窓会も、県立時代も含めると、会員数が1000名を上回る数となりました。しかも、その半数以上が酪農経営者をはじめ、酪農ヘルパー、牧場勤務、等々直接酪農に関係した仕事に携わっておられるという事で、各地に於いて、畜産業界のリーダー的役割を担っておられ、大変心強く誇りに感じております。今後、更なるご活躍に期待いたします。

さて、酪大も40年の間には幾多の変革を経て今日に至っております。私が卒業した直後に、第2牧場と第3牧場とが現在の第2牧場に一本化され、更にロータリーパーラーの建設、牧場のシンボルとも言える大型スチールタワーサイロの建設、スラリーストアーの設置などを経て、現在ではフリーストール牛舎と、近代的な設備が備わっております。

今年春には、第1牧場の搾乳牛舎が新築移転される事になっており、これが完成しますと教育施設として完璧なものとなるばかりでなく、経営環境から見ても、申し分のない施設の整備状況になると思われます。

現在、学校運営に県より厳しい方向が示されているとの事ですが、今後この厳しさにめげる事なく、英知を結集し、更なる努力により、今まで以上の成果を得られる様頑張ってください事を念じております。

祝 辞

中国四国農政局

局長 鮫島 信行



この度、財団法人中国四国酪農大学校がめでたく設立四十周年を迎えられたことに対して、一言お祝いを申し上げます。

貴校は、高度な技術を身につけた酪農経営者を養成し、酪農の健全な発展を図ることを目的として、昭和四十年に設立されて以来、実践的かつ近代的な専門教育を中心とした教育を推進されてこられました。その結果、貴校を卒業された多くの方々が、酪農経営の最前線において、地域のリーダーとして各地でご活躍されておられますことは誠に頼もしい限りであります。特に、酪農経営は他の農業部門と比較して認定農業者率が高く、若い意欲ある担い手が多く確保されています。このことはひとえに関係の皆様方の御尽力の賜物であり、深く敬意を表する次第であります。

さて、最近の酪農を巡る情勢をみますと、国際的には、WTO農業交渉において、柔軟性のある輸出国と輸入国のバランスの取れた貿易ルールの確立に向け、交渉が加速度を増しているところであります。こうした国際情勢を始めとする経済・社会情勢の変化に対応するため、昨年三月に新たな「食料・農業・農村基本計画」が閣議決定されたところですが、併せて、畜産分野においても「酪肉近代化基本方針」及び「家畜改良増殖目標」を見直したところであります。

新たな「酪肉近代化基本方針」におきましては、自給飼料基盤に立脚した畜産経営の育成、安全・安心な畜産物の安定供給、食育の推進など、食料自給率の向上に資する望ましい畜産経営の実現に向けた様々な課題とその対応方向が示されております。また、「家畜改良増殖目標」につきましても、乳タンパク質の向上や生涯生産性の向上など今後取り組むべき課題を加え策定されたものであり、家畜の改良増殖の指針となるものであります。

このような状況の中であって、我が国の畜産が、今後、健全な発展を遂げていくためには、技術及び経営管理能力に優れた担い手の育成・確保を図ることが最重要な課題であると考えており、特に若い活力に満ち、たくましい創造力と行動力に富んだ人材が今後の我が国酪農の発展のために不可欠であります。

貴校の「広く酪農全般にわたる科学的知識と高度な技術を身につけた企業実践能力を持った優秀な酪農自立経営者養成」という教育方針に沿って、高い識見と技術を有する教師陣のもと育まれた優秀な学生が、中国四国管内のみならず、日本の酪農業の将来を明るく切り開いていくことに大いに期待しています。

また、近年、貴校では、入学生に対する教育はもちろんのこと、それ以外にも、酪農ヘルパー要員に対する実務研修も実施されており、酪農経営の支援体制の確立と二十一世紀を担う人材育成推進を図る上で貴校に期待するところは誠に大きなものがあります。

今後とも、幅広い知識を身につけた酪農後継者及び技術者の育成を図る観点から、貴校の役割が一層発揮されますよう、関係者のさらなる御尽力をお願いいたしますとともに、貴校の益々のご発展と関係者の御健勝と御活躍を祈念いたしまして、私のお祝いの言葉といたします。

祝 辞

岡山県真庭市

市長 井手 紘一郎



財団法人中国四国酪農大学創立40周年を迎えられるにあたり、お祝いのご挨拶を申し上げます。

貴校は、昭和40年11月、それまでの県立酪農大学校から大きく発展飛躍され、財団法人中国四国酪農大学校として改組開校されました。我が国でも数少ない近代的酪農経営能力を身につける教育養成機関として、40年の歴史をこの地に築かれたのであります。

創設初期の昭和42年早春には、大学校内で天皇皇后両陛下の第18回植樹祭お手播き行事が行われ、学生と共にジャージー牛を供覧され、次いで昭和43年には第1回全日本ジャージー大会の開催、そして、平成17年蒜山ライディングパークで開催された第60回国民体育大会馬術競技についても、貴校の多大なるご協力をいただいたところであり、衷心より感謝の意を表する次第であります。

このように創立初期からの貴校と行政の密接な関係から、蒜山地域が日本屈指のジャージー牛産地となるなど酪農発展の歴史でもあり、創立40周年という節目に改めて思いを新たにします。

この間、歴代校長をはじめ教職員各位は、終始一貫した酪農という特色ある教育目標を樹立し、さらには、教育環境施設の整備拡充を図られ堂々たる校風を実現されたのであり、そのご労苦に対し深甚なる敬意を表する次第であります。

そして、今日まで酪農経営士として卒業された数多くの皆様は、貴校において修得された酪農に関する様々な科学的知識と、牧場において流汗額にした実践的酪農技術を生かし、厳しい環境にある酪農界の先駆者として活躍されていることと存じます。

現在、時代の流れは高度化・多様化し、急速な技術革新など日々進展しており、さらには、大きな経済の変化も予測されています。そのため、この時代にふさわしい人間形成と併せて、これからの経済社会に対応し得る実践的学力と社会的洞察力を備えた21世紀を築く新しい酪農教育が必要とされており、本校へ期待される大きなものを感じずにはられません。

この時に当たり、創立40周年の記念すべき節目として、輝かしい伝統を顧みながら将来の発展を期されますことは、極めて意義深い慶事であり、まことにめでたく心からお祝い申し上げる次第であります。

どうか今後とも、全校一致のご努力と関係各位のご協力により、貴校がますます隆盛なる前途を開拓され、教育目標の追求により一層の発展を遂げられますよう念願し、併せて校長をはじめ教職員各位のご健勝をお祈りいたしましてお祝いのご挨拶といたします。

「40周年によせて」

岡山大学大学院環境学研究科

教授 横 溝 功



最初の講義に、期待と不安が入り交じった気持ちでかけたことを、今でも鮮明に覚えている。平成9年10月14日のことである。中国四国酪農大学校（以下、酪農大学校と略す）の教務課の先生方がお2人、最初の時間だけ、小生の講義に陪席して下さっていた。ピンと張りつめた雰囲気の中で、小生の講義はスタートした。先生方のおかげで、1時限目の講義はスムーズに終了した。しかし、2時限目になり、先生方がいらっしゃらなくなると、途端に蜂の巣をつついたように騒然となり、かなり大声で話さないと、講義が進まなくなる。幸いなことに、小生の講義が「畜産情報処理」でパソコンを用いた農業簿記の演習を中心としていたので、かなりの学生の興味を惹きつけることが出来た。他方、演習のスピードから一端外れると、急速に講義への興味を失い、挙句の果てはパソコン教室の後部の床の上で熟睡する猛者まで現れた。

このことに関しては、今は昔である。年々受講生は真面目になり、最近では、声を囁らして大声で講義する必要はなくなっている。かなりの学生が静かに受講してくれるようになった。わずか10年弱でたいへん大きな変化だと、小生はつくづく感じている。また、当初は最終試験を課していなかったが、橋本尚美先生からアドバイスを受けて最終試験を課すようになり、講義にも緊張感が生まれるようになったのではと思っている。

小生の講義がパソコンを用いるが故に、教務課の先生方や事務の方々には、多大のご助力をいただいていた。ご芳名を出すことは控えさせて頂くが、皆様方のご助力に対して深甚なる謝意を表したい。

さて、小生、(社)中央畜産会の非常勤コンサルタント団員になっているが、その一環で、平成14年2月1日に(社)山口県畜産会(現、山口県畜産協会)が、支援している酪農団地の酪農経営者に、経営計画について講演を行い、その後、懇談するという貴重な機会を頂いた。その席に、小生が平成10年度に酪農大学校で講義した時の学生がいたのであるが、そのことは後で知った。彼は、酪農経営の後継者として参加しており、小生の講演を聴いた後、意見交換にも積極的に話題提供してくれていた。どこか見覚えがあり、気にはなっていたが、お互いに酪農大学校という接点があったことを見出せなかったのは残念である。小生が彼のことを知ったのは、自宅に戻り、酪農大学校で頂いた平成10年度の学生名簿に、彼の名前を見出したときであった。

このように、酪農家として第一線で活躍している人材と再会し、酪農大学校の役割に改めて感銘を受けた次第であった。また、40周年という長い年月の中で、日本の酪農部門に数多くの人材を輩出されてきたことを考えると、小生、心服する次第である。また、このような貴重な教育の一端に参画させて頂いてことに心から感謝している。今後は、調査や会議などで、酪農大学校の卒業生の方々とお会いした時には、小生の名前がすぐに浮かんでくるような、印象に残る講義を心がけたいと考えている。

これからの「酪農施設学」

鳥取大学名誉教授

尾崎 繁



鳥取大学農学部にて在職中の1969（昭和44）年3月から、ご縁があって「酪農施設学」の非常勤講師をつとめさせていただいて以来、36年がたちました。受講生は卒業直前だった第3期生から41期生にわたっております。1969年といえば、日本の酪農が拡大期に入った時期でもありました。当時から1995（平成7）年までの酪農事情や講義のあらましについては、創立30周年記念誌『30年のあゆみ』に寄稿させていただいたとおりです。それから早10年になりますが、私はこの間に鳥取大学を定年退職し、そのあとも引き続き「酪農施設学」を担当して現在に至っております。

毎年5～6月ごろに2回、10時間ずつの講義をするために鳥取から蒜山をたずねますが、ちょうど蒜山は春から初夏に移り変わる季節で、蒜山三座やその裾に広がる牧野と早苗のグリーンがいつも温かく迎えてくれます。また、入学したばかりの新生諸君との出会いも楽しみのひとつですが、近年、非農家の出身者や女子学生が増え、ここでも学生の多様化が進んでいることを感じさせられます。

ところで、蒜山地域と鳥取県中部との交流の歴史が古いことはよく知られているところです。私の蒜山通いが始まった頃には、倉吉と蒜山のあいだを犬狹峠越えで1日数往復走るバスをよく利用していました。宿のテレビのローカルニュースや天気予報は鳥取のしか映りませんでした。それが今では犬狹トンネルの開通（1997年）によって積雪時でも楽に行き来できるようになりましたし、さらに2004（平成17）年には県境を挟んで蒜山地域を含む真庭市と旧関金町を含む倉吉市とが連携し、一層交流が深まる気運が盛り上がってきております。

すこし話がわき道に逸れましたが、ここで私が担当する『酪農施設学』について触れさせていただきます。このところ全国的に見て酪農家数ならびに乳用牛の飼養頭数の減少傾向は続いておりますが、1戸あたりの飼養規模に関しては、引き続き拡大が進んでおります。中国四国地区でいえば、前年の39.4頭から40.6頭（2004年2月現在。農水省「畜産統計」）に増えております。このような拡大基調の中で、乳用牛の飼養管理方式や施設の技術革新が進んでいることは、前掲の『30年のあゆみ』でも述べたとおりですが、その後の10年間を振り返ってみると、人間と乳用牛（動物）との係わり方に対する社会認識が大きく変わりつつあることに気がつきます。

その代表的な事例は2000（平成12）年の「動物の愛護及び管理に関する法律」（通称「動物の愛護及び管理に関する法律」（通称「動物愛護法」）の大幅な改正と強化です。これまでともすると、乳用牛は経済動物の名の下に、人間にとって都合の良いように飼われてきました。生産性の向上や効率性の追求を重視した飼い方がそれです。時代は変わり、動物の苦痛を考え、動物がより快適に過ごせる飼養環境を重視する方向に移ってきています。「酪農施設学」の中核となる「牛舎施設」は正に乳用牛の日常生活の場であるだけに、このような視点が益々必要になるものと思われれます。乳用牛の気持ちになって、飼い主である人間と乳用牛とが共生可能な牛舎のあり方を研究することが、これからの「酪農施設学」に課せられた重要なテーマだと考えます。

創立40周年を機に酪農施設への思いを新たにするとともに、長年にわたり講義の場を与えて下さった酪農大に感謝の意を表したいと思っております。

おわりになりましたが、酪農大の益々のご発展と、卒業生ならびに在学各位のご健勝とご活躍を心よりお祈り申し上げます。

大きな歩み ー半世紀までもう一步ー

おかやま酪農業協同組合

代表理事組合長 山崎博文



創立40周年おめでとうございます。

永年にわたり学校運営にたずさわってこられました関係者の皆様方のご労苦に深甚なる敬意をあらわすとともに、半世紀までもう一步となった節目のお慶びを申し上げます。

今でこそ、専門学校への進学は普通になっていますが、設立当時はまだ専門大学校そのものが社会に知られておらず、生徒募集・講義・実習牧場の確保等に先人のご苦勞が忍ばれます。社会が大きく変化する中で40有余年の風雪を役職員のご努力で乗り越えられ、多くの有能な卒業生を世に送り出されていますことは高く評価されているところです。

さて、酪農大学校と本組合とは、設立当時より牛乳を通じて取引関係がありましたので、酪大の歴史と組合の歩みには幾つかの共通する部分があります。なかでも蒜山地区でのジャージー振興とともに県下に多くの酪農後継者を養成輩出されたことは大きな功績であり、その実績は後世に語り継がれるものと思います。蒜山の牧歌的風景と愛らしいジャージー牛は今や岡山県を代表する風物詩にまでなりました。

酪大と本組合が一体となり農家経営の手助けをしている事業のうち特筆すべきはヘルパー事業への取り組みです。本組合は全国に先駆けて独自にヘルパー制度を立ち上げ、酪農家の子弟を中心にヘルパー要員を養成し、主に冠婚葬祭と病気入院に派遣していました。酪農の規模拡大により年々ヘルパー需要が増加し、人員増と技術的な向上が強くもとめられてきました。そのような時代背景の中で、酪大が平成3年に西日本のヘルパー養成機関として認可され、有能な人材を多く育成されたことで組合のヘルパー事業は安定・定着したと云っても過言ではありません。

また、30有余年にわたり卒業生の皆様にささやかな記念アルバムを贈呈させていただいていることも共に歩んできたことの証かもしれません。おからく教育財団（旧ホクラク教育財団）は昭和49年に設立し酪農後継者の激励と結婚問題に取り組んでまいりました。卒業アルバムを贈りさらに結婚のお祝いを贈呈させていただいた方が数多く地元に残られていることは我々の喜びであり自慢できることです。この事業は今後とも継続したいと考えています。

このように酪大と組合の関係は年々深くなり、平成14年には正組合員として加入していただいたことで一層強固なものになるものと考えています。

今後、酪農家が減少する中で学校運営は厳しいものになることが予想されます。教育には近道がありません。設立の精神を大切に今後ますますのご発展と創立半世紀の記念祝賀会が盛大にできますことをご祈念申し上げます。お祝いの言葉とさせていただきます。

創立40周年を迎えて

財団法人 中国四国酪農大学校

校長 有 富 敬 典



昭和40年11月、中国四国9県及び兵庫県の10県による財団法人中国四国酪農大学校が誕生してから40年を迎えました。

その間約1,000名の卒業生を輩出し、この多くの方々が全国各地で活躍いただいております。今や広く全国に知られる酪農専門の教育機関となって参りました。

これも一重に国、岡山県を始めとした構成各県、地方競馬全国協会、更には地元自治体並びに関係各位のご支援、ご指導のおかげと改めて厚くお礼を申し上げる次第であります。

平成17年は歴史に残る平成の大合併の年で、地元真庭市が誕生した記念すべき年でもあり、又、本校卒業生の活躍が目立った第12回全日本ホルスタイン共進会・第4回全日本ジャージー共進会が開催され、多くの関係者にとって忘れることの出来ない年でもあります。こういった年に創立40周年という節目の年を迎え、多くの関係者、卒業生及び職員共々本校の歴史に1ページを記すことが出来ますことは誠に感慨深いものがあります。

最近における酪農情勢は、1戸当たりの経営規模は年々拡大しているものの、戸数は後継者不足、高齢化による経営放棄等を主要な原因として、ここ10年余で半減するというように急速な減少を示しております。

また、食の安全と食料の安定供給の確保が強く求められている昨今、食糧の需給動向についてみますと、約13億人の人口を抱える中国が今後食糧輸入国に転ずるなど、世界の食糧需要が長期的には逼迫するという懸念もあることから、国を挙げて食糧自給率の向上に向けた取り組みがなされているところでありますが、生産現場を担当する者無くして食料の安定供給はあり得ません。

こうしたなか本校は、付属牧場はもとより全国各地の先進的農家での実習を教課に取り入れた、全国的にも例の無い実習を重視した酪農専門の教育機関として、即戦力となる酪農後継者あるいは技術者を目指す若者を全国から受け入れ、これの育成に努めて参り、又、今日の酪農界では欠くことの出来ない酪農ヘルパーの養成につきましても、西日本で唯一の研修施設として指定を受け、今日までに450人の研修を行って参りました。

本校の教育方針は体で覚える実践教育であり、これに必要な教材としての牧場施設は平成18年度にはほぼ整備できる見通しではありますが、これから先、酪農を目指す若者にとって魅力ある学校とするため、40年を経過し老朽化した学生寮を始めとする施設の整備、あるいは新しい技術を身につけた担い手の育成には欠くことのできない新しい機械、機材への更新等多くの課題も残っております。

国を挙げての行財政改革が進められ、道州制、広域連合あるいは統廃合といったような言葉をよく耳にする昨今、中国四国9県及び兵庫県によって構成されている本校が次代の手本となり、更なる充実、発展が図られますよう、関係各位のより一層のご理解、ご協力を切にお願い申し上げます。

最後に、創立40周年を迎えるに当たり、これまで本校の礎を築き、育ててこられました先人諸兄に対し心から敬意と感謝を申し上げますとともに、全国各地でご活躍いただいております卒業生の方々の今後ますますのご健勝、ご活躍をお祈り申し上げます。

現 役 員


(平成18年3月現在)

役職名	氏 名	職 名
理事長	藤原 師仁	岡山県農林水産部長
理 事	有富 敬典	(勸)中国四国酪農大学校長
	河原 正彦	鳥取県農林水産部長
	法正 良一	島根県農林水産部長
	中川日出男	広島県農林水産部長
	嶋岡 正三	山口県農林部長
	河野 博喜	徳島県農林水産部長
	大山 茂樹	香川県農政水産部長
	喜安 晃	愛媛県農林水産部長
	川上 泰	高知県農林水産部長
	黒田 進	兵庫県農林水産部長
監 事	伊藤 通雄	山口県農林部次長
	谷口 浄	高知県農林水産部副部長

役職名	氏 名	職 名
評議員	金山 聖	岡山県畜産課長
	鹿田 道夫	鳥取県畜産課長
	松本 公一	島根県農畜産振興課長
	積山 豊道	広島県畜産振興室長
	西村 強	山口県畜産課長
	三船 節男	徳島県畜産課長
	栞島 正憲	香川県畜産課長
	大本 健路	愛媛県畜産課長
	西野 逸雄	高知県畜産課長
	渡邊 大直	兵庫県畜産課長

顧 問	鮫島 信行	中国四国農政局長
-----	-------	----------

歴代校長・副校長

校 長				
(県立) 初代	(財団) 初代	2代	3代	4代
				
惣津 律士 (S36.12~38. 3)	蔵知 毅 (S38. 4~42. 5)	花田 時太 (S42. 5~48. 3)	金島 卓司 (S48. 4~49. 3)	田淵 志郎 (S49. 3~51. 4)
副 校 長				
				
			永井 仁 (S48. 4~53. 3)	

校 長				
5代	6代	7代	8代	9代
				
信江 茂 (S51. 6~53. 3)	花房 清人 (S53. 4~54. 7)	三宅 茂 (S54. 7~55.12)	宮本 宣明 (S55.12~57. 3)	三村 剛 (S57.4~59.3)
副 校 長				
				
永井 仁 (S57. 4~59. 3)	竹内 秀雄 (S53. 4~55. 3)	服部 剛 (S55. 4~57. 3)		

校 長				
10 代	11 代	12 代	13 代	14 代
				
石田 正之 (S59. 4~H元. 3)	植月 昌彦 (H元. 4~ 3. 3)	雛川 信昭 (H 3. 4~ 6. 3)	原 真一 (H 6. 4~ 7. 3)	古好 秀男 (H 7. 4~12. 3)
副 校 長				

校 長			
15 代	16 代	17 代	18 代
			
神原 啓 (H10. 4~11. 3)	小福田満郎 (H11. 3~12. 3)	古好 秀男 (H12. 4~17. 3)	有富 敬典 (H17. 4~現在)
副 校 長			
			
		中山 敏之 (H14. 4~16. 3)	西家 純一 (H16. 4~現在)

酪農大学の思い出

同窓会阿新支部長

県立1期生 柴田卓志



今は酪農にかかわっていないので、寄稿は失礼しようと思っておりましたが、蒜山での生活がなつかしく、思い出は遠くなりましたが、酪農に大きな夢をのせ希望にもえた学生時代を思いつくままにペンを取りました。

私は1期生でしたので、これから「酪大」の歴史が始まるというその誇りはありました。緊張しながら県庁での入学式をおえ、津山の酪農試験場での間借りの学生生活に入りました。昭和36年11月のことでありました。季節は冬でしたので毎朝の食前作業は寒気が厳しく寒さを体で覚えるようにと指導を受けました。作業は牛舎の掃除、牛の手入れ等でした。-8℃の朝が続いたのを覚えています。皆元気いっぱいでした。

翌年の2期は蒜山の新校舎へ移りました。まだ未完成の学校なので学生のすることはいっぱいありました。飼料の生産は大きな仕事でした。

校舎の前に小高い丘があり、雑木が切られたままでした。午後は鍬で木の根を掘り起こし、人力で草地造成に励んだこと。

また、乾草づくりやサイレージづくりは学生も先生も総動員でした。サイレージづくりは畑に穴を掘り、ビニールを敷き詰め、その中にトウモロコシを大型カッターで吹き込みます。穴の中には学生10~15人が入り、飼料袋を頭からかぶり、トウモロコシを汁をあびながら足で踏み固め、サイレージダンスを踊り、夕方には足が動かなくなるまで行いました。あとビニールでふたをして土をかけて終わりです。良質のサイレージが出来たように思っています。

夜はよく先生方の宿舎へ押しかけました。特に惣津校長のところへはよく行きました。話題が豊富で畜産のこと、政治のこと、外国事情、果ては戦争体験まで尽きることなく時間のたつのを忘れ、又ウィスキーをご馳走になることも楽しみでいつも遅くまで居り、今思えば迷惑であったろうと思います。学校は未完成でしたが、1期生は幸せであったと思っています。新しい学校なので各方面から注目されており。自分でも頑張ろうと云う気持ちでした。「ケンカ」もよくありました。1期生は年齢もバラバラで、当時の農村の不平分子の集まりの感がありました。酒もよく飲んだし、争いごとも多くありましたが、酪農という共通の希望がありました。

私にとって忘れられないことの1つに昭和37年だったと思いますが、酪大が月刊誌「地上」に数ページにわたって写真入で全国に紹介されたことがありました。その表紙に大きく私の写真が載りました。びっくり致しましたが、保存しておけばよい記念になったであろうと思いました。

卒業後は農協の酪農係から始まり、畜産関係の仕事に25年従事し、その後地方自治の仕事をしていましたが、この度の行政合併を期にそれもやめて今は自宅で健康を気遣いながら農作業に汗を流しています。終わりになりましたが、創立40周年を迎えた酪農大学の益々のご発展と、校長先生をはじめスタッフの方々、そして在校生の皆さんのご健勝をお祈り申し上げます。

40周年に思う

同窓会岡山南支部長

県立2期生 千葉靖代



40周年記念おめでとうございます。県立2期ですので、私にとっても牛飼40年になるかと思うと、老いたと同時に愛牛と共に良き時代を歩んで来たと思います。我々2期生は最初に蒜山の地に入り、毎日汗をかきながら校庭の整備、草地の整備をし、夜は一杯飲む毎日であまり勉強した記憶はありません。しかし卒業後は70%以上の生徒が酪農後継者として就農し、現在でもそれぞれの地域の主導者として頑張っておられます。中には2代目も酪大卒で、親子で立派な経営をしておられ、酪大で育った人がおかやま酪農を支えてくれています。歴代の先生に感謝します。

私たちの時代は、乳業メーカーに搾れ搾れといろんな面で助成してもらい、年々乳価が上がって恵まれた時代でした。現在の様なWTO等の国際化対応のみならず産地間競争にも打ち勝っていくには、経営をきちんと維持して行くことが大前提で、能力のある者でなければ経営できない時代に入ったと受け止めています。酪大の校外研修等では社会性を身につけることが最大のポイントのはずなのに、今息子が酪大を卒業して家に戻ってもいつまでも親離れできないことが最大の悩みです。しかも親も子離れできないでいるこの関係を一度打ち切らないと自立した農業者になれないと思います。乱暴な言い方ですが、後継者が出来の悪いバカ息子だったら息子に後を継がせず牧場リース事業を活用して、新規就農者に入ってもらった方が良いと思います。そんな人材を酪大で育てて欲しいと願っています。

今年、乳が苦戦していますが、我が国の酪農乳業界はこれまでも数度の需給緩和の時期を経験しています。生産調整の実施に加えて、その度に知恵を出し合い危機を乗り越えてきた過去の例にならい、この難局を乗り越えることを確信しています。私は、乳牛40~50頭、圃場5ha、通年サイレージ給餌を目標に家族労力で頑張る実現した経営が一番安定していると思ひので、この様な経営を推奨します。また現在いろんな美味しい飲み物が氾濫していますが、何と言っても牛乳は数少ない自然食品。将来も不滅の栄養食品だと思います。

回顧

県立3期生 野田 健
(旧姓 中間)



創立40周年記念おめでとうございます。

顧みますれば走馬灯のように星霜を経ること40年、その間1000名余の卒業生の皆様方は、全国各地でご活躍され、中心的役割を果たしながら夢と希望に胸を熱くし、毎日を躍動していることでしょう。還暦を過ぎ、過去を反芻しながら、孫たちに期待を持つ現

在に至っておりますが、それぞれ大きな夢を追いながらも、いろいろな事情で先没した同級生のご冥福をお祈り致します。

思えば鋤・鎌・鍬で狭い耕地を経営していた、爺ちゃん、婆ちゃん、母ちゃん（父ちゃんは出稼ぎ）、の三ちゃん農業と言われる小規模経営に、行き詰まりを感じ、「なんとかしなければ」と老け込んでいた時代に、父親が1頭の乳牛を飼っていたことから、また人工授精師の資格も取れる魅力から、母校を選択し、はるばる種子島から蒜山まで乗り継ぎ乗り継ぎの2日かかりで受験に行ったのが昨日のこのように思われます。その当時（現在でも）の種子島の農業はサトウキビ、カライモ、水稻が主でその廃棄物を利用した副産物として黒豚・肉牛（黒毛和種）・乳牛（ホルスタイン）、を各農家で1、2頭、飼育しているだけで、大型機械など買えないし、利用する場所もない、年間総収入は一戸当たり30万円から80万円で3桁（百万円超）農業をめざし「もう1頭増やそう」を合言葉に島民あげて努力していた時代でした、所得倍増からバブル経済高度成長の真直中、夢と希望をもって入学致しました。

入学したての第一印象は種子島の酪農家とはかけ離れた蒜山の土地の広大さ、トラクターでの農耕、肥料散布、牧草の刈り取り、トレーラーでの運搬・乳牛を閉じ込めての搾乳、しかも手でなく搾乳機による搾乳した牛乳が直接牛乳缶に集積され冷蔵される。またまたビックリしたのはお金（濃厚飼料）を牛にやっている（種子島ではサツマ芋のくずとイモツル・砂糖きびの葉っぱ、畑の土手の草、それに米ぬかなどで、お金で買った飼料を餌にするのは珍しい。）からです。赤い色の乳牛を見たのも雪を見たのも初めてでした。

もう1つビックリしたことは畑を犠牲にして牧草を育てることでした。サトウキビやサツマ芋を作付けしている種子島では考えられないことでした。しかしビックリばかりしてはられません、経営の在り方、乳牛の寿命と受精の確率、乳脂肪率の向上、乳牛の健康管理と濃厚飼料の割合および濃厚飼料の栄養価の計算などなど。沢山たくさん、日本酒を飲む（種子島ではイモ焼酎とビールで日本酒を飲む機会がない）のも勉強して卒業、「サー頑張るぞー」と種子島に帰り、いろいろ計画を立てたが、なかなか頭数を増やすことができない、畜舎の増築もできない。銀行・農協の融資など年収60万円の農家にはとんでもない話であって、3年経っても1頭も増やすことができない有様でした。仕方無く25歳で農業(酪農)に見切りをつけ、神奈川県警察に奉職すること30年余、退職後は種子島に帰り、残念ながら4町歩ほどの田畑は小作させ、健康を支える裏方さんとして健康維持管理のお手伝いをして家族で接骨院を経営しております。

種子島の酪農家を視察いたしましたところ、1000頭からの乳牛（ホルスタイン）を飼育している方がおりまして「種子島でもできたんだ」と感心しているところです。時々友人の牛舎に行きオッパイの観察をしています。

時代の流れと共に、少子化と後継者不足が大きく横たわり最近の農業は厳しいものがありますが、どのような社会や時代が来ようとも食料を生産・供給するという営みは、永久に消えることはありません。

バブルは崩壊したが環境、食料、資源への関心は高まるばかりです。いつも学園だよりを拝見させて頂き、酪農大学校は何時の時代にも時代の先端を行っていることを感じ、嬉しく思います。蒜山での思い出をありがとうございました。

母校創立40周年を期に次の50周年に向け益々の発展を祈念いたします。

私の27年間

(財)12期生 小童谷 規 夫

40周年記念誌の発行おめでとうございます。

卒業以来27年。毎年送られてくる学園だよりを楽しみに酪農経営を続けています。

現在、有限会社ヒジャデーリー 代表取締役として、成牛100頭・育成牛30頭の経営をしています。

家族は、妻・子供5人（小学校1年生から大学4年生までの2男3女）と母と私の8人でとても賑やかです。子供の教育費に毎年500～600万円掛かり、生活は大変ですが、牛のお蔭で何とか凌いでいます。寄稿を期に、私の27年を振り返って見たいと思います。

昭和53年、希望を胸に無限の将来を信じて、酪大を卒業…。

成牛45頭の経営をする父の後継者として就農しました。

が、わずか3ヶ月で父が不治の病に倒れ、私は経営者になってしまいました。補助事業で出来たばかりの牧場と、父がしていた保証先が倒産し、5000万円以上の負債を抱えて、マイナスからの絶望的スタートでした。酪大と実習で鍛えた体、学んだ酪農知識を武器に『無いのはお金だけだ!』と、昼夜なく積極的に酪農に取り組みました。

3年ほど仕事と父の看病に明け暮れました。その後、数年すると何とか先に明るいものが見え始めました。（この経験が私の精神的支柱になっています。）そして家の新築・結婚・子供たちの誕生…と続き、借金の完済は平成3年まで掛かりました。また、その年は公社事業で120頭フリーストールの牧場を3億円で建設し、1億円の借金を作りました。

(私は馬鹿です。)

この牧場建設に当たり以下の目標を定めました。

①牛を放し飼いにし動物福祉に努める…牛を幸せにすれば必ず経営者も幸せになる。

(現在) 10産以上の牛も現役で活躍しています。

16年から毎年生涯乳量10万キロ突破牛も出ています。

素牛コストは最低をキープしています。

②牧場を法人化して社長になる…法人化により経営を透明化して生産コストの低減を図る。元銀行員の妻の得意分野である複式簿記、エクセルなどを利用して、経営管理・税務管理の徹底化を図る。

(現在) 法人化により毎月決算の導入をしました。

納税額の適正化を図るため、顧問税理士を設置しました。

お陰で社長になれました。

③環境美化に努め消費者の視察に耐えられる牧場にする…花・ボンチ絵風看板の設置・整理整頓・機械器具の
野外放置をしない等

(現在) 妻・母のお陰で花の溢れる牧場になりました。

看板屋出身のヘルパーさんのお陰でかわいい看板も多数できました。

④糞尿処理は完璧にする…糞乾ハウス・堆肥舎を整備し、製品堆肥を敷料にリサイクルする。余剰分の製品堆
肥は堆肥センターに持ち込み利用してもらう。

(現在) 糞尿処理は問題なく処理できています。

周辺民家とも良好な関係を保っています。

等の成果をあげることができました。

追加投資も多額に上り自己負債額は1億5千万円になりましたが、あと数年で完済できる見通しとなりました。

『努力は必ず報われる。』

成功を信じて頑張ってきたものが形になりつつあります。

60歳定年をめざしています。が、その後の牧場経営を、誰にゆだねるかを考えながら、これからはのんびりと、経営を続けていきたいと思っています。

追伸

12期生の皆さん、元気になっていますか？

同窓会をしたいのですが、誰か発起人をして下さい。よろしくお願いします。



牧場全体



妻と愛犬(ヘン)



創業50年になりました

酪農大学校40周年記念に寄せて

(財) 16期生 上 森 勝 美

自分は、今現在運送会社へ勤めています。その会社より出向をして、明治飼料で仕事をしています。家では両親が今でも酪農を行っていて、自分の子供も酪農をやりたいと思っていて、農業高校にも行き、酪農大学校にもこの春より行くことになりました。よろしくお願ひします。

さて、酪大の思い出は、一つに酪農をやろうと思った同世代の青年がいろいろな問題とか、悩みとかを一つ屋根の下で、同じ食事をしながら、学んだことだと思ひます。自分たちの頃は、大変に先輩はこわかった思い出があり、入学したての頃はそんなこともあったなど今では良い思い出です。自分たちの16期生は、横のつながりは電話をしたりとか行っています。これから子供が酪農をやりたいならば、親として少しでもサポートしていきたいなと思っています。

現在は成牛25頭、育成牛7頭、水田80アール、草地2ヘクタールでグラスサイレージとトウモロコシサイレージで年間行っています。



酪農大学校での思い出

(財) 27期生 大 隈 精 二



この度は、創立40周年誠に、おめでとうございます。私も卒業してから、早13年が経ちました。諸先生方には、色々大変お世話になり、ありがとうございました。

酪大で過ごした2年間を思い出して見ますと、たくさんの友達と過ごした楽しい時間が一番の思い出です。4、5人で毎日お酒を飲んで夜遅くまで話していた事や、腹が減ったと言っでは真夜中に蒜山サービスエリアにカップラーメンを毎日のように食べに行った事、車に乗って何をするでもなく米子に何回も行った事など、その当時は仲間と一緒に同じ時間を過ごしたのが一番の思い出として今でも強く残っています。

私、個人としては色々ないたづらをしまして、2、3思い出に残っているのを話しますと、ラップサイレージに穴を開けて、当時の平本先生に物凄く怒られた事、牛舎のあちこちに記念として、自分の名前を書いて回った事、又当時から車は申請しないと察に持ち込めなかったのですが、申請が面倒くさいと思ひ、黙って山に止めていたら、警察から「不審車がある。」と言われ、車の事で当時の谷田先生に物凄く怒られました。先生に見つからないように車を山に隠し置いていた事は今でも、当時の仲間と話をするとき出てくる話です。私は本当に様々な面で先生方にお世話になった様に思ひます。

卒業してから、友達は各地へと分かれてしまいました。結婚式でよんだり、よばれたり、集まる機会が卒業後6、7年ぐらい続き、会うといつも、学校の話で盛り上がりました。

私は卒業後、株式会社アスコ（当時の畜産興農社）に入社しました。この会社は動物医薬品の卸販売をする会社です。本社は愛知県豊橋市にあり、営業所は東北地区、関東地区、中部地区、中国地区で23箇所あり、営業所でも卸販売を進めています。

私は岡山、三次、米子、そしてまた岡山営業所に戻り頑張っています。この会社に入ってビックリしたのが、仕事で各農家を訪問するのですが、酪農大学校卒業生が本当に多い事でした。でも私にとって、仕事をして行くうえで酪農大学校卒業生という共通点があるとすごく話がしやすく、農家さんとも昔の話で盛り上がります。

今では、仕事で酪農大学校第1牧場、第2牧場とお取引をさせてもらっています。在学中にお世話になった先生も何人かおられ、仕事で訪問したときなどよく昔の話になり、当時と変わらない先生と生徒の関係になって話をしてしまいます。私は酪農大学校を卒業してからも、仕事とはいえ何回も母校に行けることは、とても嬉しいことだと思っています。

最後になりましたが、農家を経営され動物医薬品が必要な先輩方、後輩のみなさま、最寄の卸業者に、株式会社アスコがあれば是非宜しくお願いします。

酪農大学校40周年を迎えて

(財)29期生 難波正憲

酪大40周年記念誌の発行を行うとの事で、原稿の依頼が有り、お受けさせて頂きました。

私達、29期生が卒業した、平成7年11月に、酪大30周年、本館竣工記念、ジャージー導入40周年記念が行われて、もう10年も経つのかー、という思いです。

酪大ですごした2年間は、大変思い出多く、貴重な2年間でした。

平成5年4月、また雪の残る蒜山の地に有る、(財)中国四国酪農大学校に入学し、各地より集まった同期たちと、大学校生活が始まりました。私達の入学した年は、冷夏、長雨の年で、牧草、コーンサイレージ共に収量、品質が悪く、作業等苦労しました。

翌年、研修で、全員全国の農家に行き、私も島根、北海道、岡山にある三件の農家に研修でお世話になり、大変貴重な体験をさせていただきました。

研修を行っていた年は、前年とは打って変わって、猛暑、異常渇水の年で、作業は、天気が良いので、スムーズに進んだのは良いのですが、炎天下での作業が続き、体力的にきつかった事など、色々な思い出が有ります。

授業、実習が終わった後の寮生活も、友達と楽しく過ごせました。夕方の作業が終わり、夕食後は、倉吉、米子へ買い物、ボーリング、等々遊びに行ったり、みんなで部屋に集まって、朝の搾乳が始まるまで夜通し話をしてみたり、楽しい日々を送りました。

授業、実習を通じて大変お世話になった先生、農場助手の人達。皆さん楽しく、持ち前の知識と経験を活か

し、私達生徒に良い事、悪い事、色々と教えて下さって、その上、毒舌を活かし、精神面でも鍛えてもらいました。卒業した今でも、仕事上の事とか、共進会等で会って話をしたり、お世話になっています。

私が酪大に居た2年間は、色々な物が変わっていく途中で、在学中に変わった物は、第2牧場のパーラーでした。卒業して、酪大に遊びに行くと、私が居た時の物が次々と変わって行って、少し寂しいと思う事も有ります。

酪大で学び、遊んだ2年間は、大変良い思い出です。

おかやま酪農協で働く私は、多くの先輩、後輩に囲まれて仕事をしています。これからの酪農情勢は、全国的な生乳過剰からの生産調整など厳しい面も多くありますが、頑張っていきたいと思います。

第1牧場牛舎が建設中という事なので、完成したらまた遊びに行きたいと思っています。

酪農大学校を卒業して思うこと

(財)30期生 瓜生由美

『反芻とは何ですか』と聞かれて、『分かりません。』と面接で答えたことを覚えています。

大学校では、私の土台となる経験をさせて頂きました。この経験があったからこそ卒業後の酪農ヘルパー、海外研修、ジェネティクス北海道へ就職する道が開かれたと思っています。また酪農の勉強はもちろんの事、世間知らずだった私にとって寮生活や研修先で学んだ常識や知識もたいへん大きな宝です。

酪農をこれからも続ける上で何度となく大きな壁にぶつかると思います。エサ代が上がり、乳価が下がるだけではなく、環境面や衛生面でも厳しくなり1頭1頭の管理に手を抜けない状態です。しかもそんな厳しい中をくぐり抜けて搾った牛乳も、冬になれば場所によっては余ってしまう。生産者が感じている不安は、皆同じだと思っています。そんな中でも、人の意見を上手く取り入れ、常に向上心を忘れず常識ある内容を続けていけば、これからの酪農を支える農家も増えるのではないかと思います。私もそんな酪農家でありたいと思っています。

中国四国酪農大学校をたくさんの生徒が卒業していった中で、畜産、酪農に携わっている人は少ない様に感じられます。なんとなくさみしい気も致します。これからの大学校は、将来農業を背負っていく若者たちの意欲や希望もいっしょに教育して、卒業後も酪農を続けられる状態を開いていける場所であってほしいと思います。

最後になりましたが、校長先生をはじめとする先生方には、毎日、気苦労の絶えない日々であったと思います。しかし、おかげで今の私達がある事を心から感謝致します。有り難うございました。

今後もより一層の中国四国酪農大学校の発展を応援致します。

なつかしい酪大時代

(財)32期生 孝本 真二



中国四国酪農大学校を卒業してから、8年が過ぎ、今回の酪農大学校の40周年記念誌の寄稿を依頼され、酪大生時代の思い出や、卒業後、現在までの状況を書かせてもらうことにしました。

思い出せば、酪農大学校に入学したばかりの時は、初めての親からはなれての寮生活がはじまり、不安になったことがありました。しかし、今思えば、楽しい寮生活が送れました。

授業では専門的なことを多く学べ、大変良かったと思います。実習では、早期の搾乳、氷点下での作業、夏の暑い中の草刈など、しんどかったです。2年生になると、半年間という長い間の農家での校外研修では、肉体的、精神的にしんどかったけど今思えばとてもいい経験になったと思っています。校外研修が終わって、学校に帰ってくると、自分の中での在学中の最大の目標としていた家畜人工授精などの資格試験があり、一生懸命勉強したこともありました。また、卒論の制作では、深夜まで担当の先生方につきあってもらい迷惑をかけ、大変お世話になりました。

卒業後は、校外研修でお世話になった農家に就職し、6年間修行させて頂き、2年前に実家に戻り、家業を継ぎ自営を行うようになりました。

現在は、和牛繁殖経営を行っています。成牛33頭、仔牛25頭を飼養しています。まだ、経験したことも無い事が数多くあり苦勞しています。しかし、当時の酪農大学校の先生方にアドバイスを頂き、なんとかやっています。

今回原稿依頼されたことで学生時代の事が多く思い出され、当時の先生や友人など多くの人のお陰で今の自分があるような気がし、感謝しています。

今後も、酪農大学校から多くの後継者、畜産関係者が出てくる事を期待しています。

がんばる

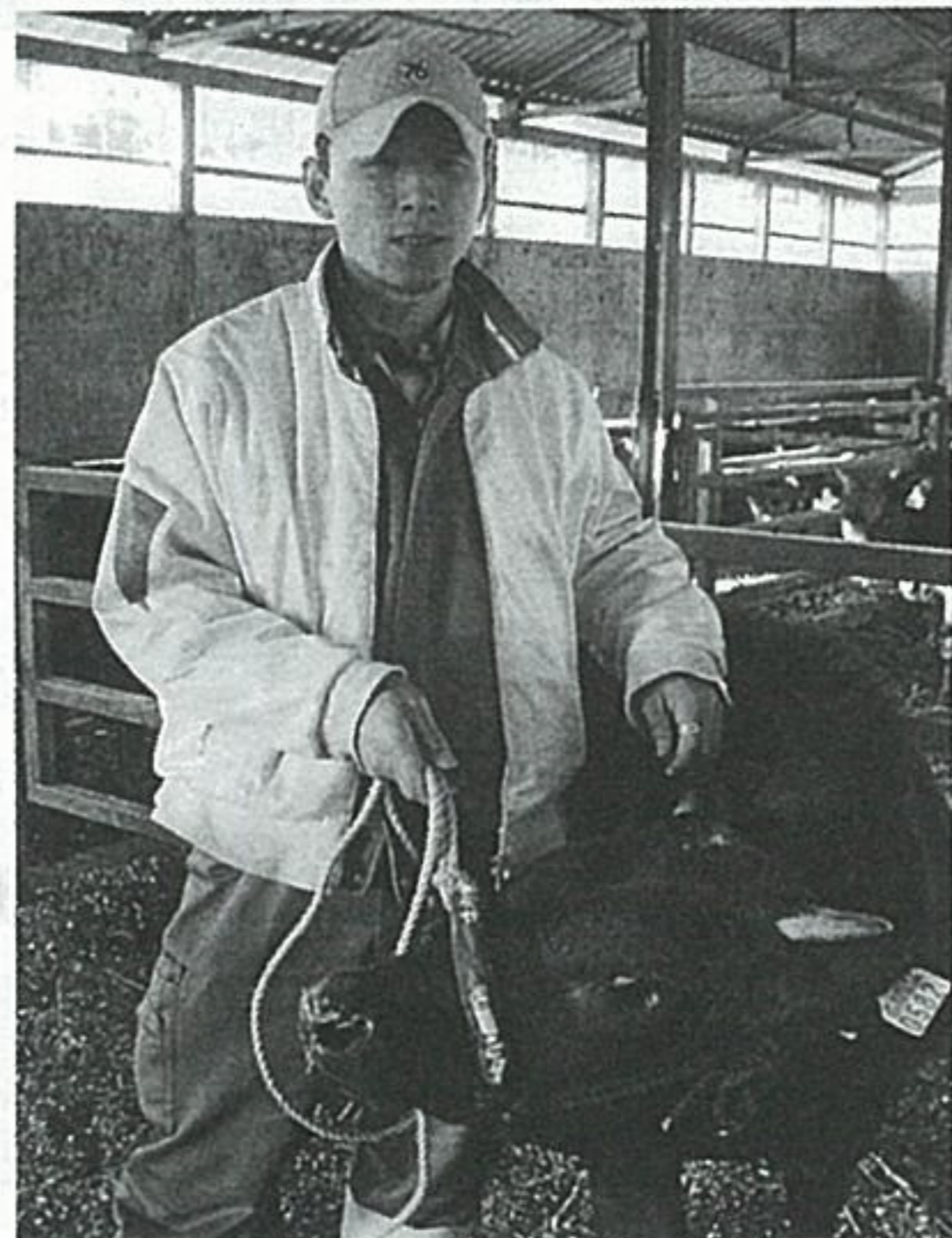
地域農業の担い手たち

岡山県賀陽町の孝本真二さん(三六)は、四月から父親が経営する和牛繁殖に本格的に取り組み。町内の畜産農家で学んだ繁殖技術や子牛販売の知識を生かし、経営に役立てる。頭数を増やし、管理を充実させるのが目標だ。人工授精師としても活躍し、すでに町内の農家からの信頼は厚い。



岡山県賀陽町 孝本 真二さん(三六)

中国四国酪農大学校(岡山県川上村)を卒業後、町内の畜産農家で六年間働いた。この農家から肥育まで幅広く携わり、技術に磨きをかけてきた。現在、自宅では父親が一人で繁殖牛二六頭、子牛二五頭を管理する。真二さんは仕事を「やった分だけ返ってくる自給が、失敗するならば若いうちに」と語ります。



自分の経営に専念することで「父親の負担を減らすこともできる」と話す孝本さん

和牛の繁殖経営に本腰

大きく影響する。「リスクは安定した経営を確立したい」と語ります。人工授精師はJAひびくの委託を受け、町内の和牛農家の繁殖牛を三十頭程度に増やし、「今以上に管理を徹底し、いい牛をつくらなければならない。市場で肥育農家に直接の価格を上げ、聞くなど、情報収集にも力を入れる。」

同JAは「農家の立場に立ってアドバイスをしている。また若いが高齢の農家からも信頼されている」と評価する。当面は、自らの経営の拡大と町内の和牛農家の担い手として地域の期待も大きい。

【家族】 家族は、父・一郎さん(五七)、母・慧子さん(五七)、祖母・静香さん(八七)の四人暮らし。四人兄弟の末っ子。経営は和牛のほか、牧草二畝、水稲五十畝。趣味はゴルフ。

酪農大学校での思い出

(財) 33期生 同窓会大阪以東支部長

垂谷 太一



財団法人中国四国酪農大学校創立40周年、誠におめでとうございます。この場をお借り致しまして、心よりお祝い申し上げます。

私は、平成11年第33期の卒業生であります。その当時の思い出は、第2牧場新牛舎の完成と、NHKの番組「ひるどき日本列島」の放送です。

第2牧場の牛舎は、昭和40年代に建てられ、老朽化ということもあり旧牛舎から見て、右側に新しい牛舎が建設されました。卒業生のみなさんの多くが、旧牛舎での牛の世話や勉強がほとんどだと思いますが、以前の牛舎では牛を1頭1頭つないでいるつなぎ飼いのスタンション形式でありまして、現在のようにフリーストール形式ではありませんでした。繋ぎ飼い牛舎ですと搾乳終了後、牛をつなぐ時に思うように決められたスタンションの中に入ってくれず苦勞したこともありました。

牛舎の近くには、タワーサイロが2棟あり第2牧場のシンボルのひとつでもあります。

新牛舎は、以前の牛舎に比べて搾乳を行う際に、牛舎から搾乳室までの移動距離が大変短くなりました。それと牧草や飼料を与える時にもトラクターが牛舎の中まで入っていけるような構造にしてありまして、私が一番驚いたことは、子牛のコーナーでミルクを与える時に機械の操作で与えることができるということです。以前までは人が1頭1頭の子牛にミルクを与えていたのですが、現在は自動哺乳機で子牛のコーナーの所に吸い口が二対設置してあり、そこに子牛が口をもって行って吸い始めると機械が作動して、与える分量を計算するというシステムに大変驚きました。

また、第1牧場に関しましては、牛舎の建設の話はありましたが、私が卒業するまでの間は、そのままでした。平成17年度よりようやく搾乳牛舎が改築され、牛たちにとっていい環境でのスタートだと思います。

もう一つの思い出は、NHKのお昼のテレビ番組で、蒜山地域の観光地や見どころを紹介していく「ひるどき日本列島」が、平成9年の8月夏のとてもいい日に第1牧場で放送されました。草刈機で草を刈る所や、牛舎内での作業の様子、また搾乳器具やバルククーラーの説明、子牛にミルクを与える場面、そして樋口先生と削蹄の様子などが放送されまして、リポーターが近藤富士雄さんとバルセロナオリンピック銅メダリストの奥野史子さんでした。とてもいい思い出になりました。

最後になりますがこれからも酪農大学校のますますのご発展を心からお祈りいたします。

全共を終えて

(財)34期生 美甘正平

僕が酪大を卒業したのは今から5年前です。卒業後、就農と同時に臨時ヘルパーとしての生活が始まり、毎日初めての事ばかりで一日一日が早かったです。

その年は岡山全共の年で、周りは全共ムード一色でした。最終選抜で我が家も2頭の出品が決まりましたが、「このままでは勝てない」と言われた一言で、酪大在学当時、研修先の農家で、毎日かかさず牛体を冷水で洗った経験を思い出し、毎朝作業前に実行しました。自分なりに努力した結果、岡山全共で準名誉賞を獲得した時の喜びは今でも忘れられません。

栃木全共までの5年間は仲間と共に様々な経験をし、共に高め合いながら、時には夢を語り合いながらおいしい酒も飲みました。

あっという間の5年間でした。日々の作業の合間を縫って、牛の手入れや調教をするのは、心身ともにつらい時もありましたが、家族、仲間と共に頑張ってきた事が、ジャージーの部最高位賞獲得という最高の結果に結びつき、うれしさと同時に感謝の気持ちで一杯でした。

栃木全共が終わって思うのは、飼いやすい牛と共進会で勝てる牛というのは全く別ではないという事、経営面と共進会では共通する考えが多いと感じました。

この経験を活かし、これからの経営に役立てて行きたいと思います。



休憩中 (筆者は左手一番奥)



第4回全日本ジャージー共進会風景



美甘さんと愛牛

自分を見直す2年間

(財)36期生 安倉可奈



私は酪農大学校を卒業し、地元である山口県の酪農ヘルパーになってもうすぐ4年になります。現在、49戸の酪農家を5人体制で廻っています。

私は高校3年生の夏休みに、数日ほど酪農家へ研修に行った時、女性の酪農ヘルパーの方と話をする機会がありました。この時初めて酪農ヘルパーという職業がある事を知りました。このことをきっかけに、そのヘルパーさんが卒業した酪農大学校に入学し、卒業後は酪農ヘルパーとして働きたいと思うようになりました。

入学したばかりの頃は、とにかく何もかもが初めての経験で戸惑いました。また、県外での寮生活、そして毎日の定例作業。私は農業高校出身ですが、動物が全くいないところだったので、本格的に乳牛の世話をしたのはここに入学してからでした。でも、月日が経つにつれて早朝の作業にも慣れ、いろんな免許や資格を取得して、1年間はあっという間に通り過ぎました。

2年になって校外研修が始まり、最初の研修先では仕事が遅いことで毎日の様に農家の人から怒られてばかりでした。そして、最終的には「あんたは酪農の仕事に向いていないよ」と言われ、ショックを受けました。次の研修先でも、その言葉が私の頭から離れませんでした。そして、地元の山口県での研修中に、その酪農家さんから「酪農ヘルパーやってみないか？」という話が出たとき、1度断りました。以前「酪農の仕事に向いていない」と言われてしまった私に、酪農ヘルパーなんて勤まるはずがないと思ったからです。

校外研修も終わり、卒業後の進路を1人で悩んでいましたが、「確かに私は酪農の仕事に向いていないかもしれないけれど、酪農ヘルパーは1度は自分になりたいと思っていた職業なんだからやってみよう。悩むのはその後でもいいじゃないか。」と考え、卒業後は酪農ヘルパーに就職しました。

今振り返ってみると、校外研修に出る前の私は、学校という狭い世界にとらわれていて酪農を甘く見ていたのかも知れません。研修中に「酪農の仕事に向いていない」と言われたおかげで、自分の能力の無さと現実の厳しさを知り、改めて自分が何故酪大に入ったのか、何がやりたかったのかを思い出すことができたのです。酪大生として過ごした日々は、自分を見直す貴重な2年間になりました。

酪農ヘルパーに就職したばかりの頃は、また誰かに仕事が遅い事で怒られるのではないかと不安でしたが、誰1人としてそのような事を言う人はいませんでした。代わりに、「仕事は遅くてもいいから、確実にこなしてくれ。」と誰もが口を揃えて言っていました。

ヘルパーは、仕事の速さではなく確実さを求められています。いつも働いている酪農家さんに安心して休んでいただく為、大切な財産である牛を責任持って世話をするのが仕事です。仕事の時間ばかり気にして確認を怠り、その結果事故を起こしたり、怪我をしてしまったりは酪農家も安心して休めず、信用問題に関わります。

実際にこの仕事をしてわかったのは、酪農家が各々信念とこだわりを持っていることです。私の職場である49戸の酪農家でさえ搾乳方法や飼料給与などの手順が異なります。でも、どの酪農家にも共通して言えるのは、事故や怪我の無いように、また牛を大切に扱って欲しいという事です。

最初に述べたように、私は酪農ヘルパーになってもうすぐ4年になります。後輩もでき、またヘルパー職員としては中堅の位置になってきました。しかし、初めの頃に比べると、最近は事故を起こしてしまう事が多くなりました。4年になるからと言って決して自信過剰にならず、確実に仕事を続けていきたいと思っています。そして、酪農家さんが安心して旅行にいけるような酪農ヘルパーを目指していきたいです。

酪農大学校を卒業して学校に思うこと

(財)37期生 長 田 重 信

酪農大学校を卒業してはや3年が経ち、学校に色々な意見をもっています。

まず、始めに後継者のやる気と技能習得についての問題があります。酪農大学校では、やはり教育機関ということもあって、作業工程などはかなりマニュアル化されています。実際、私も学校に通っていた時には、作業をしていても自分で創意工夫することがなく、自分の仕事さえやっていたら良いと思っていました。でもマニュアルに依存しすぎると、何とというか、決められた事しかできない人間になってしまうと思うのです。将来、牧場で勤務する人達ならマニュアル通りやっていたら良いでしょう。しかし、いざ経営をするとなると話は別だと思うのです。マニュアルの中でやってきたものが、マニュアルがなくなってしまうとどうしていいのかわからなくなってしまうと思うのです。

現に私の牧場でも、1人の実習生が来たのですが、2年間学校で数多くの現場実習をしてきたはずなのに、いざ酪農家での研修になると、人に言われるまでは、何もせずただボーと立っているという状態で、それは研修期間中ほとんど毎日目につきました。彼は、学校を卒業後、就農する予定でしたが、それではまずいと学校に申し出て、1年間北海道の牧場で研修することになりました。

こういうことが今の若い人には多く見受けられるように思います。それなら、私は学校卒業後、すぐ就農するのではなく、1年でも2年でもいいのでなるべく牧場で実習をしてもらいたいと思います。また、出来ることなら海外での研修も良いものになるのではないかと思います。海外なら、知らない土地で言葉も通じないし、マニュアルなどありません。朝晩の搾乳を除いては…。昼間の時間などはほとんどの場合、自分で仕事を見なければならぬからです。

また、第1牧場、第2牧場の発展のために、日に1度もしくは2日に1度程度でも牧場の改善点を話し合ったり、先生方も研修から帰った2年生に相談などをしたらますます良くなると思います。

財団法人中国四国酪農大学校創立40周年によせて

岡山県農林漁業担い手育成財団

参与 古好秀男

(平成7年4月～平成10年3月校長)

(平成12年4月～平成17年3月校長)



財団法人中国四国酪農大学校が創立されて以来、平成17年度（2004）でここに40周年を迎えられ心からお慶びを申し上げます。

私は、岡山県職員であった現職当時の3年間と岡山県を退職してから後5年間の通算8年間にわたり財団法人中国四国酪農大学校に勤務させて頂きましたが、この間、農林水産省、中国四国農政局、岡山県、構成県、JRA、地全協、装蹄師会、中央畜産会、県畜産協会、酪農ヘルパー全国協会、真庭市、おからく、蒜酪、乳牛改良同志会、蒜山観光協会、蒜山商工会、蒜山ライオンズクラブ、同窓会並びに地元の住民の皆様方には、酪農大学校の活動を通して計り知れない程のご厚情にあずかり、公私ともに大変お世話になりましたことを心から深甚なる御礼と感謝を申し上げますと共に、熱く燃え滾るあの感動は私の人生にとって忘れることは出来ません。

特に思い出のあるものを挙げてみますと、平成7年は財団法人中国四国酪農大学校の創立30周年の記念すべき年に当たると同時に、蒜山地域にジャージー乳牛が導入されて40周年の記念すべき年でもありました。幸い岡山県立酪農大学校当時に建築された旧本館を新改築することに成っておりましたので新本館の完成と合わせて、この2つの記念事業を一緒にする事になり、岡山県を始め関係者と協議しながら推進をしたことを今でも鮮明に覚えています。記念式典の日程が決まっておりましたので、間に合わせるために新本館の工期を短縮することが余儀なくなり、旧本館で行っていた日常業務の事務を慌しく体育館の2階に移転いたしました。

また、岡山県が勧める国際交流の一環として、南オーストラリア州ビクターハーバー市のクロンプトン市長のお世話によるオンカパリングTAFE学院との交換学生締結交渉に、知事の命を受けて、アデレードに出向き、交換学生締結式と記念式典を酪農大学校で行うことへの出席承諾を取り付けた時の感激は、言葉に出来ないほどの素晴らしいものでした。記念式典には、南オーストラリア州から8人の出席と、酪農大学校の理事長でもありました長野士郎岡山県知事のご臨席を仰ぎ、酪農関係者と共に体育館一杯に集い盛大に挙行了したことや、本館の玄関に新しく知事が揮毫された看板を2人で掲げたことを、今でも鮮明に覚えています。平成8年度から交換学生交流が始まり7年間続きましたが、相手方の都合で紆余曲折もあり、平成15年（2003）に再び私と橋本さんがアデレードに出向き、酪農組合のSADAと締結して、国際交流が今だに続いていることは、学生の励みとなり喜ばしい限りです。

施設整備の思い出は沢山あり限られた紙面では一口では語り尽くせませんが、その中でも特筆すべきは、老朽化して使えなくなった宿舎6棟についてで、“かけや”を振り上げて職員が総出で何日も掛けて解体焼却整理をしたことです。

総体的には、平成9年（1997）に老朽化した2牧の搾乳牛舎改築、飼料庫、堆肥化施設新設の予算化、更には、研修棟新築、酪農ヘルパー研修棟新築、男子学生寮の屋根改修、女子学生寮の屋根改修、体育館の屋根改修、下水道施設整備、1,000メートル近い配水施設整備、惣津校長胸像移設、白い牧柵、風呂増改設、食堂内

改装、ポプラの倒木、学生への自動車の申請持込許可等思い出は尽きません。

教材施設で印象深いのは、長年異型の古いトラクターでしか免許試験練習ができず、困っていた時のことです。特に酪農作業の命とも云える免許試験練習用大型農耕用トラクターを、教材として新規に2台同時に整備出来た時の感激は何物にも変えがたい喜びでした。

学校経営的には、県内外の高等学校に出向いて手を尽くして努力し学生募集をした訳ですが、定員40人の学生募集に対して集まるのは毎年24人程度ということで苦慮していたので、理事会に諮り、思い切って平成13年(2001)から推薦入学制度を取り入れ、学生募集を始めたことです。

また、ヨーネ病の発病には一番頭を痛め、全般的な経営の上から大きな打撃を受けたと同時に、防圧実施と収入減少の狭間で大変な判断力を要求され苦慮しましたが、関係機関のご協力とご支援を頂いて5カ年計画を樹立し、あらゆる手法を尽くして防圧を徹底的に実践対処したことです。

私の実践教育の基本的な考え方は、生活環境を良くする為に酪農大学校の総ての物が教材であると云う信念から、主役である学生のために素晴らしい教材整備一筋に情熱を傾注して参りましたが、まだまだ充分とは云えません。しかしながら長年の懸案課題でありました第1牧場の搾乳牛舎の建設も関係者のご努力によって予算化され、平成17年度の事業で整備される運びと成りました事は、私の最高の喜びです。

創設されて以来44年間に経過し1,075人の卒業生を送り出し、彼らが中四国はもとより兵庫県や全国各地に於いて、酪農地域の中核的なリーダーとしてご活躍されている事は喜ばしい限りであります。特に平成12年(2000)に岡山県で開催された第11回全日本ホルスタイン共進会に15頭、更には第3回全日本ジャージー共進会に19頭出品し最高位の高円宮賜杯第1号を獲得、また平成17年(2005)に栃木県で開催された第12回全日本ホルスタイン共進会9頭、並びに第4回全日本ジャージー共進会に9頭出品し、ジャージーの部門で最高位賞を獲得する等、2大会連続で酪農大学校の卒業生が驚異的な大活躍を成し遂げています。大学校職員の皆様には、卒業生の52%の酪農就農率を誇る全国に例のない酪農実践教育システムを高らかに掲げ、優秀な後継者の養成に限りない情熱を傾注して頂きたいと思えます。最後になりましたが、酪農大学校に勤務された先人達の功労と現職員並びに関係者の皆様方に感謝を申し上げますと共に、益々のご繁栄とご健勝、ご活躍を心からご祈念申し上げ、お祝いの言葉とします。

良き先輩、良き学生に恵まれた思い出多き酪大

岡山県農林水産部畜産課

総括参事 柴田 範彦

(S51.4~54.3)



酪農大学校は私の最初の勤務地である。昭和51年4月1日、県庁で辞令を受け、その足で3時間かけて蒜山へ赴任した。ところが草地でトラクターに乗っていた当時の永井校長に「来るのが遅い…」といきなり叱咤激励され仰天したことを昨日のこのように懐かしく思い出す。

さて、酪大ではすぐに学生の指導が待ち受けていた。最初は先輩諸氏の講義や実習を勉強させてもらいな

らの見よう見まねであった。大学は出たもののこれといった技術もない私が、ある時乳牛の人工授精で子宮頸管がなかなか通せず汗だくになっていると、「先生僕がやったげようか」と学生から声をかけられ、冷や汗をかいたことがあった。しかしそこは譲るわけには行かず、業務終了後に再度リベンジ。当時は学生の中にも酪農家の師弟が多数おり、それなりの知識や技術を持っていて「結構あなどれないな」と思ったものである。

また、当直職員だけの日曜日に、急に雨が降り出しそうになってせっかくの乾草がだめになりそうな時、学生たちが「僕たちだけでやろう」と声をかけてくれて一緒に夢中でベールをした思い出もある。酪農の厳しさを知り、また共に学ぶ喜びも教えてもらう出来事であった。

楽しい思い出もある。蒜山地区バレーボールリーグに学生達とチームを組んで初参加し優勝したことである。1台しかない私の車に、定員オーバーの学生1人をこっそりトランクに乗せて蒜山高校の体育館へ行ったり、学生に引っ張られて、くたくたの身体にむち打って試合に参加したり、・・・懐かしい。その学生達が今では酪農をはじめ様々な分野で活躍していると聞き感慨深いものがある。この11月に栃木県で開催された乳牛の全国共進会でも、初めて出品した妹尾始（旧姓大山）君が、第3部未経産の部で優等の3席に自家産で入賞した。幸運にもその場に立ち会うことができ、大変感銘を受けた。

楽しい思い出と共に、良き先輩に恵まれたことも私にとって大きな財産である。亡き赤木場長や百野場長、そして常守さんには、酪農や草地のプロとして、未熟な私を手取り足取り指導して頂き、今はただ感謝の気持ちで一杯で心よりご冥福をお祈りしたい。日笠部長や百野場長には、スキーの先生として、業務終了後第二牧場でみんなで雪を踏みゲレンデを作っては楽しんだことも忘れられない。

住まいは古く、朝起きると枕元に雪が積もっているような環境であったが、良き先輩、良き学生に恵まれ、心豊かな生活を送らせて頂くことができた。酪農大学校での生活は、今でも私の心の支えであり、職業人としての原点でもある。御指導下さった皆様方に心より感謝いたします。

最後になりましたが、卒業生諸氏のご健勝、ご活躍と、酪農大学校の益々のご発展を祈念申し上げます。

酪農大学校の思い出

岡山県備中県民局新見支局

地域農林水産室長 中山 敏之

(S58.4～61.3・H14.4～16.3)



記念すべき創立40周年を迎えられましたことを、心からお喜び申し上げます。

私が在職したのは、ちょうど20周年事業が実施された時期の昭和58年4月から61年3月の3年間は第1回目の勤務で、第2回目の勤めは、平成14年4月から16年3月までの2ヵ年の通算5年間です。

途中、約18年間の時をおいて2回にわたり酪農後継者育成に従事したことは長い県庁勤めの中で最高に楽しく充実した日々でした。

当時、寝食をともにして働いた素晴らしい職員の皆様に恵まれ、助けていただき、勤められたとあっており、

この場をお借りして感謝いたします。

1回目勤務は昭和58年度に第1牧場で1年間、あと教務課で2年間の3年間で、第19期生14名と同期の入学でありました。

そのころ定員40名の学生募集で、昭和58、59年度の入学者は14人（岡山県内4名）、13人（岡山県内4名うち女性1名）で、2年間連続で大幅な定員割れが続いた年でした。

実習のメンバーが学生だけでは班編成が組めず、教員もかり出されました。文字通り学生と一緒に朝から夕べまで搾乳、糞出し、タワーサイロからのトウモロコシサイレージの搬出、夜9時の牛舎見回り、男子寮の点呼等、実習に明け暮れた時期でありました。

当時日本の酪農経営は安定したものの、昭和54年度以降の計画生産の実施から酪農後継者の意欲が低下していた時期だったようで、酪農大学校の存続か廃止かの議論がなされたこと、まことしやかに噂されたように聞いたことを覚えています。真相は未だに霧の中です。

入学者の激減から大学校の存続の危機のもとで、磯山教育部長の「頭のある者は知恵を出せ、知恵のない者は体を動かせ」の号令のもと、緊急職員会議が招集され、次年度の入学希望者の募集に、中国四国地域の農業関係校等に、職員が直接出かけ、進路担当の先生に酪農大学校への入学を勧誘して回りました。

また、酪農関係機関を通して県下全酪農家の子弟の進学をお願いしました。

教務課では当時新進気鋭の馬場技師の発案で、学生募集用の大型「カラーポスター」を作成配布するなどPRに努めました。

奨学金制度の創設、酪農関係免許取得機会の増設を検討実施し、また、魅力ある教育内容の充実を図ることとして、実践学習を体系化した「演習科目」の導入と実践学習時間の拡大、優良系統交配の実践学習等「無い知恵」を一所懸命絞ったものでした。

課外活動の強化を図ることにより、酪大全体の活性化を職員・学生全員で実践しました。

蒜山地区バレーボールリーグ戦に参加し、優勝しました。（野口先生の学生の送り迎えの車のなかは、夜遅くまで熱気に包まれていました。）

職員では昭和59年度岡山県職員ソフトボール大会で優勝しました。（ウィニングボールは私が大切に保管しております。）

昭和59年度には蒜山を開催地として第2回全国ジャージー共進会が開催され、酪農大学校からも出品することになり、第2牧場の伊藤場長、若田・山本先生の指導よろしく上位入賞を果たしました。当時では後継者育成関係学校からの出品は珍しく、全国でも初めての快挙として関係者からたくさんお祝いの言葉をいただきました。

昭和60年11月8日には（財）中国四国酪農大学校の創立20周年記念事業が開催されました。記念講演、記念式典、記念植樹、記念祝賀パーティー等が盛大に行われ、なかでも記念誌「20年のあゆみ」を担当し石田校長、重近教育部長のもと、馬場先生と編集作業に追われたことが懐かしい思い出として残っています。

平成14年から2回目の酪農大学校勤務となりました。酪農大学校は様変わりしていました。新校舎の整備、第2牧場の整備等、モダンな建築様式は蒜山高原にマッチするとともに、専門後継者育成機関として全国に誇れる施設に改善されていました。

平成14年秋のある日、20年前に私と同じ年度に入学した19期生の足立義隆君（現在は兵庫県の丹波市青垣町

で180頭（成牛役100頭）を飼養しており、兵庫県の酪農のトップランナーとして経営を行っている）が、美しいお嬢さんを伴って酪農大学を訪問してくれました。

「先生ひさしぶりです。私もようやく一本立ちできる酪農家になりました。身を固める決心をしました。先生に是非私たちの結婚式に出席していただきたい。」

無口で、はにかみ屋の足立君からの突然の申し出に断る理由は何もありませんでした。

平成15年3月15日、結婚式は地元福知山で、足立君が学生当時農家研修でお世話になった愛媛県の酪農家宇佐美忠孝ご夫妻、同期生（19期生）の淡路島の榎本君、岡山県勝央町の福田君、後輩（20期生）の田辺君等が出席され、盛大に挙行されました。教師冥利と言うものを全身で感じました。

後日談ですが学生当時、酪大から子牛を譲り受け、今でもその牛の系統（タマリンド）を引いた「・・・カヤベ」という名号の後継牛が経営の中に現在10頭ほどが活躍しているということでした。

現在農業界は後継者育成が農業振興の大きな課題となっております。酪農実践学習を主体にした全国で唯一の専門後継者育成学校として、財団法人中国四国酪農大学が今後益々発展されますことを心から祈念しております。



第19期生 蒜山登山



昭和59年頃の酪大本館と蒜山三座の上蒜山

酪農大学第2牧場にて（回想）

津山家畜保健衛生所

副参事 権代将人

（S60.4～H1.3）

中国四国酪農大学、創立40周年おめでとうございます。私が在職した昭和60年から4年間、学生（20期～24期）とともに過ごした酪農大学第2牧場（ジャージー牛）の思い出を綴って見たいと思います。当時の牧場は、三木ヶ原（育成舎・乾乳舎）、本牛舎（フリーバーン、その後、昭和62年に改修されたスタンション牛舎）と全国で3ヶ所しか設置されていないロータリーパーラー（12ポイント）で構成され、ジャージー牛の放牧を主とした草地酪農（野草地も含めて約85ha）で蒜山のシンボリックな要素を含みながら年間350,000kgのジャージー乳を生産していました。

私は、保護室（本牛舎に併設）の担当として「分娩牛・哺育牛の飼育」と「人工授精」を実施していました。

中でも人工授精については、大変な苦しみがありました。4月から11月過ぎの初雪が降るまで、職員と学生が一体となって粗飼料生産に汗を流して作業しているのに人工授精がうまくいかないで次年度の乳量確保が困難になり、牧場に大きな損失を招くと思い、発情牛の番号が夢に出てくる始末でした。ジャージー種の改良に使用する種牡牛は、ホルスタイン種と比べると非常に少なく精液の選択の余地のないものでした。昭和60年まで使用した「ピクシース イーグル クエテコ」の娘牛は、非常に荒い気質で、保護室とパーラーでの困りものでした。ピクシースの後継牛「ロッキーヒル シルバート レズ」の娘牛は、気質が優しく扱い易い牛でした。昭和62年頃から使用した「エム エム シー サム」と、諸先輩方の努力により購入して頂いた10本の輸入精液（国内産精液550円/本、輸入精液10,000円/本）の「エーナイン トップ ブラス」の娘牛の能力は、どうだったのでしょうか。いつの日かそっと教えて下さい。

分娩子牛の哺乳は、週令ごとに代用乳と人工乳を与えていたのですが、1月から2月生まれの子牛は、寒さも影響したのか代用乳に乳酸菌製剤を混ぜたり、“電球”や“どんごろす”で体を温めたのですが、2週令ぐらいで多くの子牛を失ってしまいました。当時は、成牛90頭ぐらいで約2割の育成牛を確保し、他の「ぬれ子」は、昭和62年に1牧へ肥育舎が完成するまで、80円～250円/頭でホクラク農協へ出荷していたと思います。

私ごと、第2牧場を卒業して17年になりますが、学生の卒業名簿を見ると"牛は、草で飼う"を実践してきた学生たちの顔や性格をよく覚えていますよ。

最後に、蒜山で開催された第60回国民体育大会・馬術競技のサポーターとしての酪大生の活躍には、目を見張るものがあり、普段の寮生活と実践教育のたまものでしょう。



18歳のジャージー牛



牛舎西側から 権代さん長女

酪農大学校に入学して

(財)41期生 小幡 農 志



私が、この酪農大学校に入学して早8ヶ月になり、この蒜山も、朝晩の気温がマイナスの日も珍しくなくなってきました。朝5時からの作業は大変ですが、朝から牛の世話をしていると酪農は自然との闘いだと痛感します。

私の実家は、ホルスタインの経産牛40頭、育成18頭を飼う酪農家です。両親2人で経営しており、2年前に農場を移ったばかりです。実家は酪農家ですが、私はもともと酪農に興味がありませんでした。私は幼い頃から両親の手伝いをしていました。内容は、糞とり、オガまき、仔牛への哺乳といった簡単なものですが、当時私は牛が怖くて近づけず、嫌で仕方ありませんでした。それから、中学、高校と進学しても家を継ぐということは考えていませんでした。

私が酪農に興味を持ち始めたのは、高校を卒業して両親の手伝いをするようになってからです。手伝いを始めた頃は、糞かきや飼槽の掃除など簡単な作業しかやっていませんでしたが、作業をやるにつれ、私の主な仕事はTMR作りになりました。この仕事をやるにつれて、天候や気温の変化によって餌を作る量の微妙な違いが分かりましたし、それによりその日の残滓の量が違ってきます。また、フォークリフトに乗って乾草や配合を入れるのもまた今までにはないものでした。この餌作りの楽しさは私を酪農へと導いてくれました。

そして、この酪農大学校の存在をデイリーマンで知り、ここに入学しました。この学校に来てから、さらに酪農という職業をやってみたいという意欲がわいてきました。

酪農という職業の魅力は、これという決まった牛の飼い方が無いということです。日本でも北海道と沖縄では違います。私は酪農を生涯続けるためには自分なりの酪農のやり方を模索しなければならないと思います。その為にもこの酪大で座学をし、また校外研修に出て研修先の牛の飼い方を、参考にする・真似する・それから発展させる、ということが大切です。

まだ、酪農という道に入ったばかりですが、両親と一緒に農場の規模を拡大し、乳量を増加させ、牛に優しい飼い方をやりたいです。また最近では郊外の宅地化が進み、糞尿の処理の問題がありますが、酪農を一般の人たちに理解していただくということも、私の目標です。

酪農大学校に入学して

(財)41期生 三宅 由美菜



私が初めて牛を目の前で見たのは今年の10月、酪農大学校の願書を書く前のこと。その時はただこの学校を受験するかもしれないのだなあ、としか思っていませんでした。

父親がこの学校のことをインターネットで見つけ、私に教えてくれたのが10月の初め。

受けるだけ受けてみようと思ったのが10月の中頃で、願書の締め切りが迫っていた頃です。受験することを決めたので高校の担任の先生に報告すると、まず学校案内を持ってくるように言われました。その高校で酪農大学校を受験するのは私が最初だったので、どんな学校か分からなかったのです。それから担任の先生との話し合いをして、願書の締め切り直前に願書を出しました。その後、受験票はいつ頃届くだろうかと思っていたのに数日しかたっていないのに届いたこと、受験番号が1番であったことに驚いたことは今でも忘れていません。12月10日に受験のため、酪農大学校に行きました。着くと受験者が私以外の誰もいないことに気がつき、これで何故受験番号が1番なのかが分かりました。試験のことはあまり覚えていませんが、その当時校長先生だった方に「牛は恐くないですか」と面接の際に質問されたことはよく覚えています。

それから4ヵ月後、無事に酪農大学校に入学し、何もかもが初めての世界にやってきてしまいました。初めての作業は第2牧場の育成牛舎だったと思いますが、その時糞出しをしていたら牛に頭突きされたり髪の毛を食べられたことがありました。多分一生忘れないと思います。その後も酪農家さんの所でバイトをしたり、共進会で牛を見たり、総合畜産センターで糞尿処理、堆肥化の様子などを見たりと入学してから今まで8ヵ月の間に様々なことを体験し、学習してきました。入学前はどうなることかと心配でしたが、初めてのことがたくさんあるのも楽しいと思えるようになりました。これから卒業するまで、研修、研修論文や卒業論文などすることがたくさんあるので、私なりに一生懸命やっていこうと思います。

僕 の 夢

(財)40期生 尾 崎 直 幸



僕の夢は、酪農という仕事を一生やっていきたいということです。

この夢に向かって頑張っていこうと思いついたのは、高校3年のころからだったと思います。

高校に入ってすぐの頃は、ただ、動物が好きで、酪農の厳しさ、大変さ、おもしろさなど全く知りませんでした。

しかし、北海道や県内での研修や共進会を通じて、酪農の厳しさや大変さ、おもしろさを知ったように思います。

特に共進会は、好きだし、やりがいのあるものだと思います。高校の時は、友達3人とでほぼ毎日、朝早くから夕方まで牛の調教や牛体洗いをしていました。そして大きな共進会へも出品することができました。

高校3年の進路を決定するとき、まだ酪農についての知識や技術が未熟すぎるから、中国四国酪農大学校に行くことにしました。

酪農大学校へ入り立ての時は、慣れない環境や作業でとても大変でした。けれども、自分にとってはどれも新鮮なものばかりだったのでとても楽しい日々でした。

酪農大学校入学後は、校内研修中に全国B&Wショーの最終選考会を兼ねた大きな共進会があったり、地区や市の共進会が開催されました。その時は、いい結果もあったし、くやしい思いもしました。けれども、今度はもっといい結果が出せるよう頑張りたい、という強い思いもありました。

2年生になって、校外各研修農家での2ヶ月ごとの研修が始まりました。

最初は北海道に行きました。その農家はブリーダーで牛の改良と共進会出品にとっても力を入れていました。そのため、各地の共進会を見に行くことができ、また大きなショーで牛をリードする経験もすることができました。

続いて岡山市の酪農家へ研修に行きました。ここでも種雄牛についていろいろ学ぶことができました。

次に校内研修を行い、最後にオーストラリア研修へ行きました。オーストラリアは土地も広く、牛の頭数も多く大規模でした。しかし、僕の研修先のホストファミリーは家族だけで多くの牛を飼育、管理しており、驚きました。日本のように個別の繋ぎ飼いはなく、大規模な飼育方式のため家族だけで多くの牛の管理が可能なのかな、と思いました。

卒業を控えた今は、酪農ヘルパーの仕事をしようと考えています。そこで培った経験と技術で、いつか将来は自分の牧場を持ちたいと考えています。

たとえば、自分の牧場を持つことができなくても一生、酪農の仕事が続けていきたいと思っています。

酪農大学校に入学して

(財)40期生 森 山 夏 季



私の家は非農家です。牛を飼育したこともなければ、野菜を栽培したこともありません。

ですが、私は幼い頃から牛を飼うということにとっても興味を持っており、祖母の家の近くにある牛舎によく遊びに行っていました。

そこで、牛に飼料を給与し、搾乳を行っている経営者の方々の姿を見ているうちに私もいつかこんな風に牛と関わりたいと思うようになり、中学を卒業する頃には地元にある農林高校に進学することを決意しました。

私が入学した高校では乳牛12頭、育成5頭、肥育10頭、と規模は小さいものでしたが、コンプリートミキサーがあったり、パーラーがあったりと設備がとても充実した牛舎でした。

最初の頃は戸惑うことばかりでしたが、学年が進につれ、もっと専門的な知識と技術を身に付けたいと思うようになり、ここ中国四国酪農大学校に進学しました。

最初はなかなか作業について行けずに落ち込むこともありましたが、同じ班の人たちの助力もあってどうにか1年間の作業に耐えることができ、また、大型特殊や牽引、人工授精などの多くの資格を得ることができました。

そして2年生になると校内を含めた4カ所の場所で2ヶ月ずつの研修に行き、各地の農家としての信念や矜持等を体感することとなり、それと同時に社会で働く厳しさ、働くことの大切さを学ぶことができました。

この大学で学んだことを基に、卒業後も牛に関わり続け農業の未来に貢献していきたいと思います。

学校の沿革

前身

- 昭和24年 7月 ○岡山県中福田家畜保健衛生所開設
(岡山県真庭郡八束村中福田)
- 昭和32年 4月 ○岡山県酪農試験場蒜山分場設置
(県立酪農大学校前身、川上村西茅部)
- 昭和38年 4月 ○岡山県乳牛育成場開設
(第2牧場前身、川上村上福田)

岡山県立酪農大学校

- 昭和36年 12月 ○津山市大田、酪農試験場内に開校
 - 酪農に関する基本的な知識技術習得と健全な酪農経営者を養成するための教育を実施
- 昭和37年 4月 ○真庭郡川上村西茅部に新校舎を建設、酪農試験場蒜山分場を吸収してここに移転し、新たに岡山県家畜保健衛生研究所を併設する。
 - 募集人員は1学年30名、1年目に4ヶ月就学し、8ヶ月は在宅研修とし、修学期間は3年間。
 - この間、学生は草地の開墾、ポプラの植樹等を精力的に行う。
- 昭和40年 8月 ○皇太子殿下行啓(昭和天皇)
(津山市を中心として開かれた第15回海洋少年団全国大会にご出席)
- 昭和42年 3月 ○県立酪農大学校閉校

財団法人 中国四国酪農大学校

- 昭和40年 11月 ○中国四国9県及び兵庫県の各県の基金を積み立てにより、財団法人組織による財団法人中国四国酪農大学校が創立される。
 - 岡山県立酪農大学校と三木が原の岡山県乳牛育成牧場の施設を譲り受ける。
 - 募集人員は1学年40名、修学期間は2年間。
- 昭和41年 8月 ○財団法人中国四国酪農大学校第1期生入寮
- 昭和42年 4月 ○昭和天皇・皇后両陛下行啓
(岡山市金山で行われた第18回全国植樹祭のお手播き行事でご来校)
- 6月 ○西日本飼料研修会が本校で開催される。
 - NHK明るい農村「農村新時代 酪農大学校」の撮影が行われ、全国放送される。
- 10月 ○ワラビ中毒が発生
- 11月 ○天皇皇后両陛下お手播き記念碑除幕式
- 昭和43年 2月 ○蒜山地方は大雪に見舞われ、第2牧場は孤立、牛乳出荷を中福田まで人力そりで行う。
- 4月 ○牧場統合(第2、第3を統合し、第2牧場とする。)
 - オーストラリア駐日大使アレンスタン・レイブン氏夫妻来校
(蒜山地域ジャーニー酪農視察)

- 9月 ○ニュージーランド交換学生来校
- 10月 ○第1回全日本ジャージー共進会開催
○「学園だより」第1号発刊
- 昭和44年 8月 ○ホルスタイン種優良基礎雌牛導入（アメリカ）
- 昭和45年 2月 ○第2牧場牛舎火災（被害僅少）
8月 ○ジャージー種優良基礎雌牛導入（ニュージーランド）
○RSK山陽放送、酪農大学校を放映
- 昭和46年 2月 ○蒜山地方に豪雪、第2牧場事務所から宿舎までロープ伝いで帰宅
10月 ○高松宮殿下ご来校
- 昭和47年 5月 ○RSKテレビ生放送、岡山・福岡・大阪より三次元放送、女子学生3名出演
7月 ○集中豪雨で第1牧場水源地に被害
- 昭和48年 3月 ○第7期卒業生、卒業記念に牛魂碑建設
（第7期生三好正文氏、揮毫による）
- 昭和49年～ ○施設整備5カ年計画樹立
- 昭和53年 ○第1・第2研修センター、男子寮、女子寮、酪農後継者養成施設、体育館、ロータリー
パーラー、気密サイロ、スラリーストアー、草地造成、牧道整備等の実施
- 昭和49年 10月 ○全国ジャージ大会開催
ジャージ種導入20周年記念事業
- 昭和50年 5月 ○NHKテレビで「酪農大学校を訪ねて」放映
- 昭和51年 ○財団法人構成各県（10県）の出捐金1,000千円が納付完了
- 昭和52年 5月 ○酪農大学校教育施設落成式挙行（第1・第2研修センター、体育館、女子寮他）
11月 ○故惣津律士初代校長胸像除幕式
- 昭和57年 9月 ○台風により本校ポプラ倒木（約50本）
- 昭和59年 4月 ○故三木知事由来のスズランを津山市内の福祉施設へ贈呈
9月 ○第2回全日本ジャージー大会開催
（ジャージ導入30周年記念）
- 昭和60年 10月 ○財団法人創立20周年記念行事開催
- 昭和61年 ○コンピューター利用講座を開始
- 昭和62年 ○受精卵移植技術講習会本校で開始
- 昭和63年 ○第24期生から学制の変更
4月～翌年3月までの1年間校内、2年次の4月～11月まで校外研修（内2ヶ月は校内
研修）、12月～3月まで校内
旧学制：4月～9月校内、10月～翌年9月校外（内校内2ヶ月）、10月～3月校内
- 平成2年 ○牛削蹄師免許講習会本校で開始
- 平成3年 1月 ○山陽新聞奨励賞受賞
（産業部門：長年に亘る後継者育成が認められる）
○酪農ヘルパー全国協会委託研修施設の指定、酪農ヘルパー養成の開始
9月 ○台風19号により第2牧場ポプラ倒木（約50本）
- 平成4年 3月 ○「ジャージーフォーラム」の開催
○女子学生増加に伴う女子寮の増築
○学生の情操教育用として第2牧場に乗馬施設（パドック）を整備
- 平成5年 ○第2牧場にオートタンDEM型パーラーを導入、併せてパーラー屋根にシンボルとしてカ

- リオン時計を設置
- 県道上福田線改良工事に伴い、職員宿舎（1棟2戸）、車庫、格納庫を移転新築
 - 第2牧場周辺を「ジャージーとのふれあい広場」として年次計画的に舗装整備
 - 学生寮裏の稲荷神社修復（鳥居、神社新築）
 - 冷夏長雨でトウモロコシ、牧草の著しい収量減
- 平成6年
- 本館の新築に着手（平成6年度から2カ年計画）
 - 学生の増加に伴い、男子寮の増設（3部屋）
- 10月
- 本校で中央畜産会主催の「担い手フォーラム」の開催
 - 異常干ばつのため第2牧場の水源を整備、乳量及び牧草量減少
- 平成7年
- 6月
- 旧本館閉舎式を行う。
- 11月
- 財団法人創立30周年及び本館新築落成記念式典
 - オーストラリア・オンカパリンガ専門学校ビクターハーバー校と相互学生交換調印
 - ジャージー導入40周年記念式典開催
 - テニスコートの新設
 - 第2牧場に貯水槽新設
- 平成8年
- 6月
- タンザニア国畜産局長来校
- 10月
- オーストラリア・クロンプトン校校長来校
 - 第1牧場ヘルパー宿泊施設新築
 - 第2牧場研修生滞在施設新築
- 平成9年
- 8月
- NHK人気番組「ひるどき日本列島」の取材を受ける
 - 第2牧場フリーストール成牛舎、育成牛舎、飼料庫、堆肥舎新築
- 9月
- 台風により第2牧場ポプラ並木が壊滅的な打撃を受ける
- 平成10年
- 4月
- 第2牧場搾乳牛新築フリーストール牛舎へ移転
 - 第2牧場TMR給餌方式の導入
 - 第1牧場堆肥舎（サークルコンポ方式）新築
- 平成11年
- 3月
- 第1回白樺植樹第2牧場旧ポプラ並木路で実施
（財団法人岡山県郷土文化財団事業により、倒木したポプラに替わる並木の形成、1500本植樹、以後毎年約100本植樹）
- 平成12年
- 7月
- 全国農業大学校協議会へ加入
- 11月
- 「第11回全日本ホルスタイン共進会・第3回全日本ジャージー共進会」が岡山県児島郡灘崎町で開催される
 - ・本校第2牧場からジャージー種牛4頭出品
 - ・第27期生永礼永禮淳一氏ホルスタイン種最高位賞、高円宮杯受賞
- 平成14年
- 4月
- 「エコオフィス・まきばと握手事業」の実施（H14～H16）
（県庁ペーパーシュレッターの畜産利用実証事業）
- 6月
- ジャージー種優良基礎雌牛の導入（熊本県小国町4頭、蒜山地域4頭）
- 10月
- 「第20回中国ブロック農業大学校研修生のつどい」が本校ホスト役で開催
- 12月
- おかやま酪農業協同組合の正会員となる。
- 平成15年
- 3月
- ジャージー種優良基礎雌牛の導入（群馬県嬬恋村10頭）
- 12月
- オーストラリア・SADAと交流協定（交換学生研修）調印
- 平成16年
- 3月
- ジャージー優良基礎雌牛の導入（群馬県嬬恋村10頭）
- 10月
- 台風23号の襲来により大きな被害を受ける

- (2 牧パーラー舎、格納庫、わら庫等の屋根の損傷、ポプラの倒木など)
- 平成17年 2月 ○第2 牧場草地でタンチョウ鶴の試験飛行
(岡山県自然保護センターによる野外調査)
- 「中国四国農大協議会プロジェクト発表会」本校ホスト役で開催
(発表：岡山市メルパルク、現地視察：笠岡湾干拓地内牧場)
- 8月 ○財団法人日本宝くじ協会助成によりバス購入
- 9月 ○貝殻等を利用した畜舎排水浄化システム実証展示施設の整備
(第一牧場・社団法人海と渚環境美化推進機構(マリンブルー) 事業)
- 10月 ○第2 牧場旧育成牛舎撤去、ふれあい広場として整備
○畜産担い手育成総合整備事業による草地造成・整備(第1 牧場、第2 牧場)
- 11月 ○畜産担い手育成総合整備事業による第1 牧場搾乳牛舎建設着手
(搾乳牛50頭ストール牛舎)
- 「第12回全日本ホルスタイン共進会・第4 回全日本ジャージー共進会」、栃木県壬生町で
開催される。
- ・34期生美甘正平氏ジャージー種最高位賞、準名誉賞
 - ・7 期生長恒泰治氏ジャージー種名誉賞
- 12月 ○蒜山酪農農業協同組合正組合員となる。

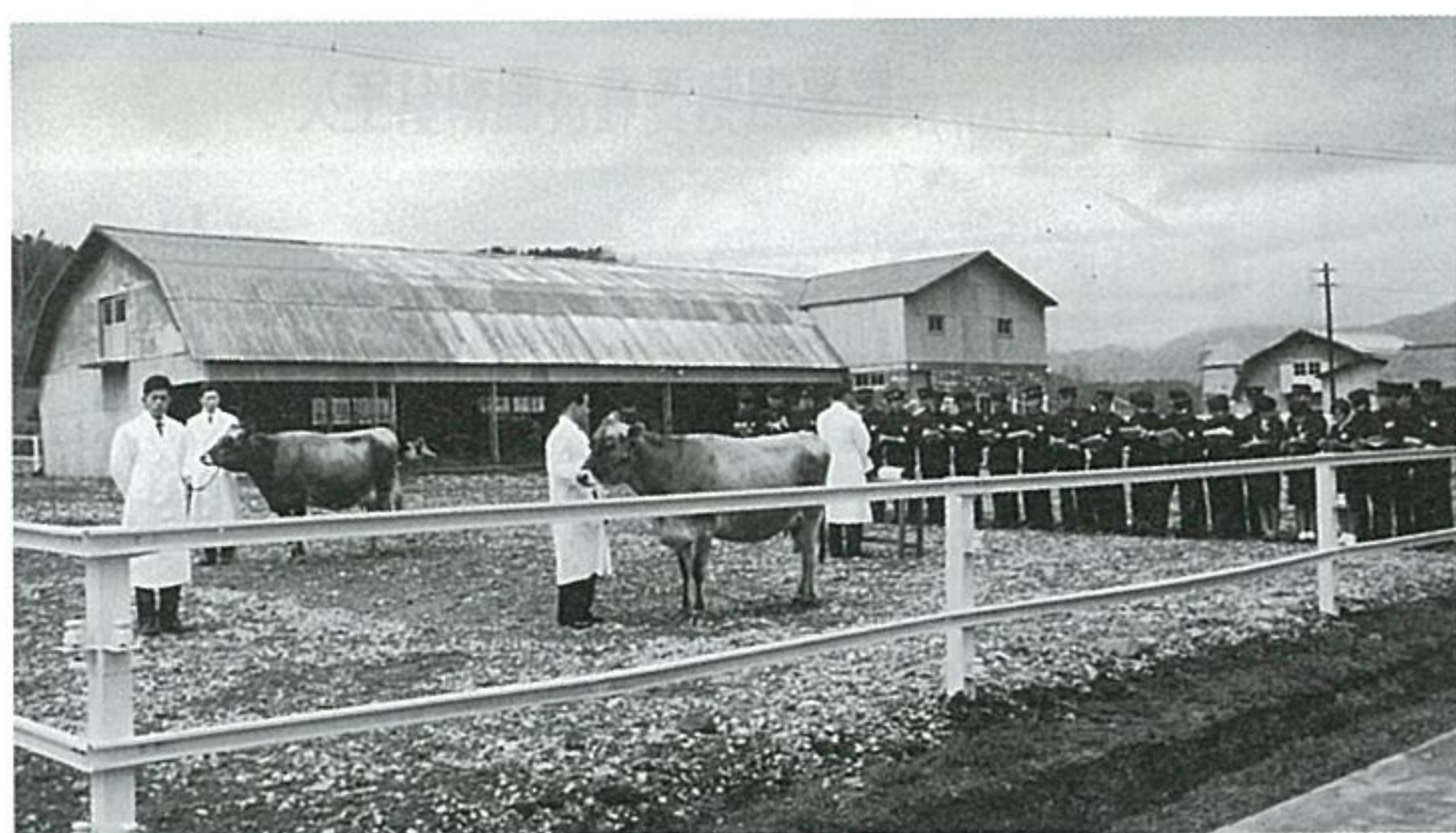
●●●●●●●●●● 写真でつづる40年 ●●●●●●●●●●



岡山県酪農試験場蒜山分場（現・本校）



岡山県乳牛育成牧場（現・第二2牧場）



牛体審査演習（昭和38年）



排水溝作業（昭和39年）



資料作物栽培演習（昭和40年）



皇太子殿下（現天皇）行啓（昭和40年8月）
県立4期保田勝治氏提供



牧野改良演習・第一牧場（昭和41年）



登校風景（昭和41年）

●●●●●●●●●● 写真でつづる40年 ●●●●●●●●●●



昭和天皇・皇后陛下行啓（昭和42年4月10日）



乾草調整演習（昭和41年）



大雪のためソリで牛乳運搬（昭和43年2月15日）



第1回ジャージー牛共進会（昭和43年10月）



トラクター演習（昭和48年）



三木ヶ原寮（昭和44年）



ジャージー導入20周年記念大会（昭和49年10月）

●●●●●●●●●● 写真でつづる40年 ●●●●●●●●●●



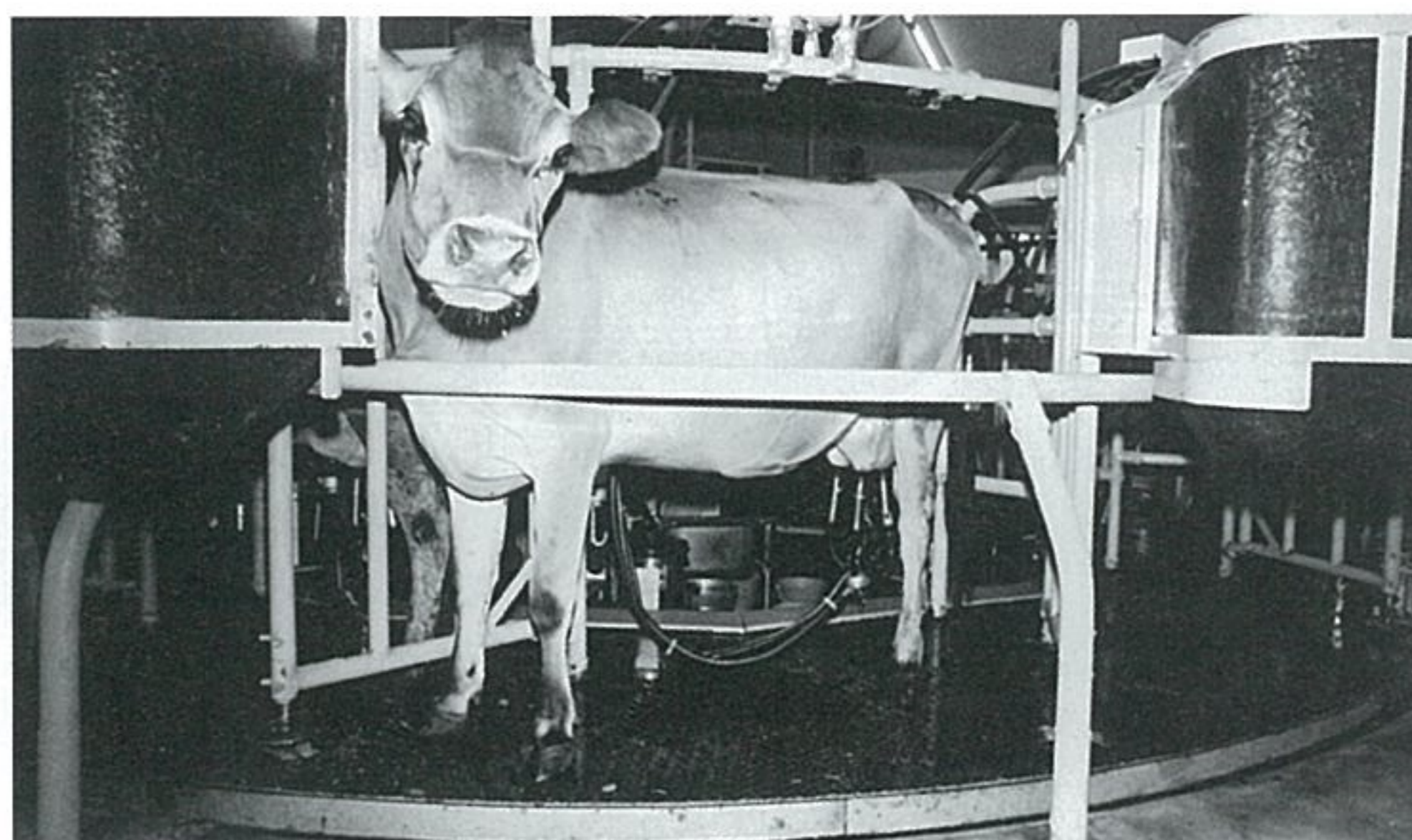
人工授精師免許実技試験（昭和51年）



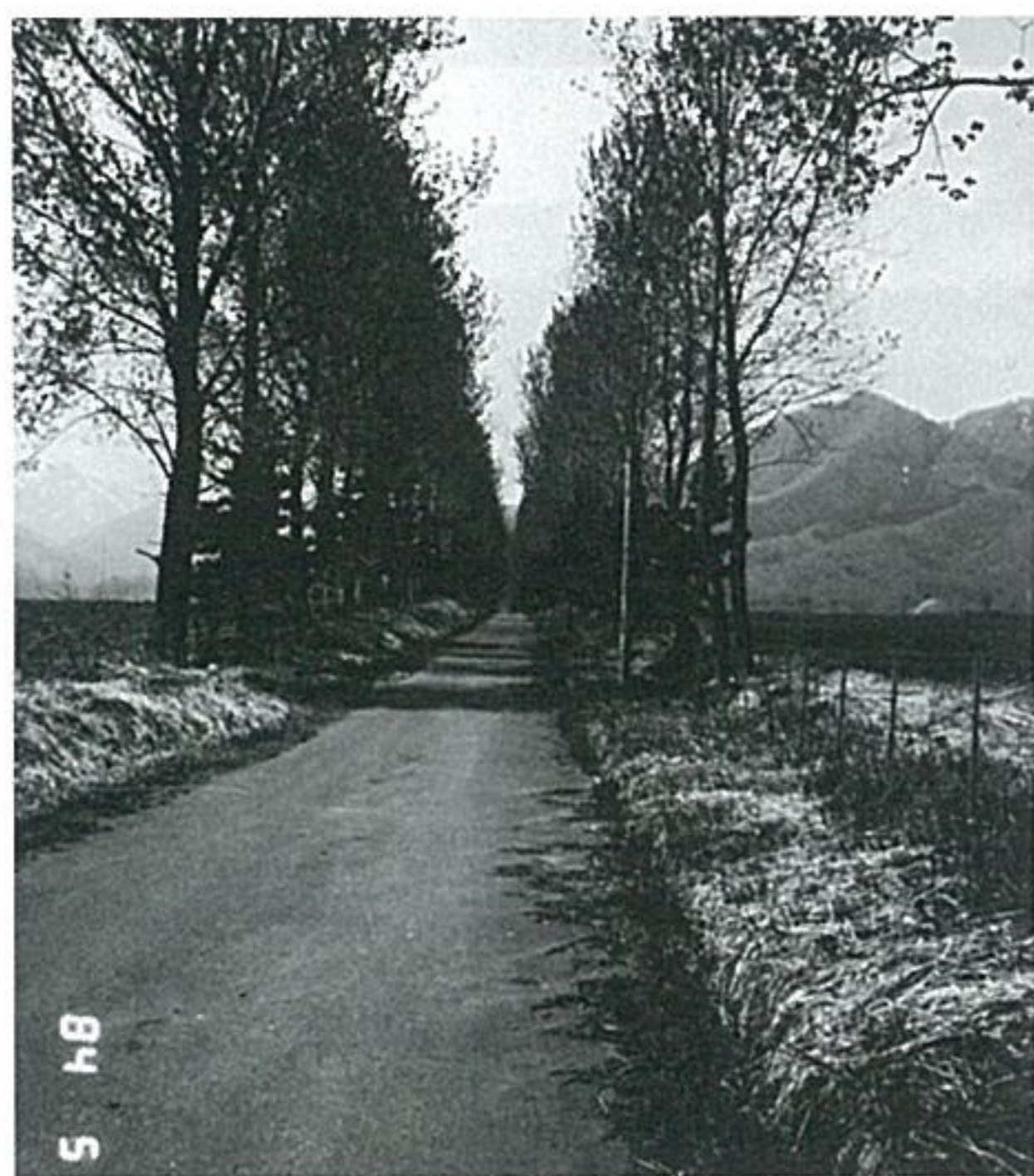
女子寮新築（昭和52年）



ロータリーパーラー完成（昭和53年）



ロータリーパーラー搾乳（昭和53年）



在りし日のポプラ並木（昭和59年）



財団創立20周年記念（昭和60年）



第2牧場育成牛舎新築・間伐材利用（昭和60年）



酪農ヘルパー要員養成研修開始
（酪農ヘルパー全国協会委託）（平成3年）

●●●●●●●●●● 写真でつづる40年 ●●●●●●●●●●



雪中の放牧（平成3年）



女子寮増築（平成4年）



馬用パドック新設・第2牧場（平成4年）



第2牧場パーラー舎カリオン時計設置（平成5年）



ダンデムパーラー新設・第2牧場（平成5年）



閉校間近い本館（平成6年）



乾草収穫作業（平成6年）



同窓会第1回総会（平成7年3月17日）
川上村老人センター

●●●●●●●●●● 写真でつづる40年 ●●●●●●●●●●



同窓会出席者（平成7年3月17日）



創立30周年・本館竣工記念式典（平成7年11月）



本館新築（平成7年）



本館コンピュータールーム（平成7年）



ヘルパー研修宿泊施設新築（平成8年10月）



第2牧場放牧風景（平成8年）



第2牧場研修生滞在施設新築（平成8年）

●●●●●●●●●● 写真でつづる40年 ●●●●●●●●●●



台風によるポプラ倒木（平成9年9月）



海の市山の市搾乳体験（平成9年9月）



第2牧場フリーストール牛舎新築（平成9年）



第2牧場TMR導入（平成10年）



第2牧場堆肥舎新築（平成9年）



白樺植樹〔旧ポプラ並木〕（平成11年3月）



エコオフィス・ペーパーシュレッダ
飼料利用実証開始（平成14年～16年）

写真でつづる40年



ポプラ並木倒木・台風23号（平成16年10月）



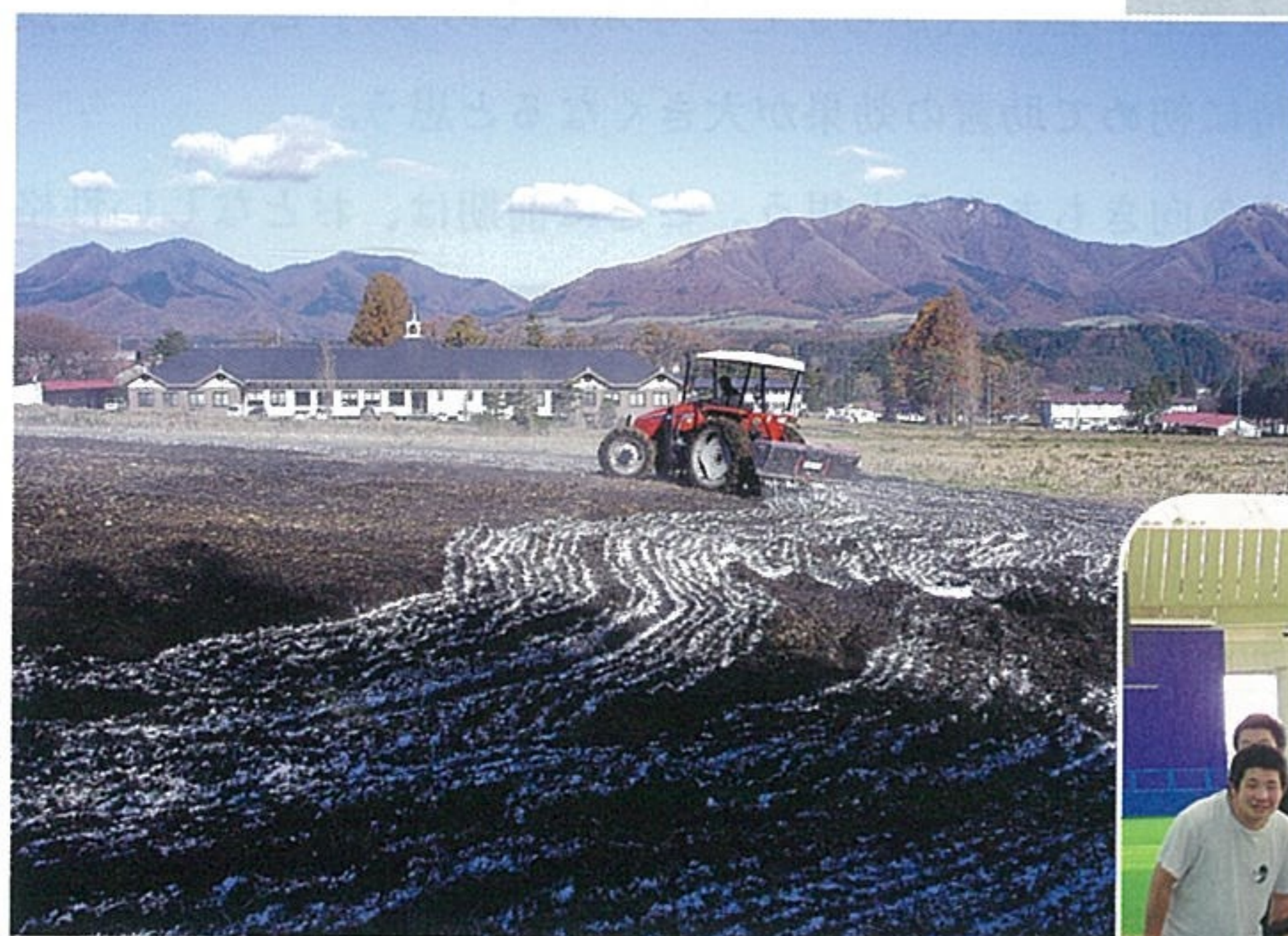
貝殻利用尿浄化施設設置（平成16年）



バス購入・宝くじ協会助成（平成17年8月）



第2 牧場丹頂鶴放鳥（平成17年2月9日）



第1 牧場草地造成（平成17年10月）



中国地区農大交流会・ソフトボール（平成17年10月）

「研修生を受け入れて」

島根県大田市

(財) 4 期生 住 田 益 三



卒業以来36年が経ち、学校で学んだこと、研修先での思い出が今も十分に生きています。おかげさまで、両親と私たちの4人体制から、平成8年に善一が酪大を卒業し、平成11年に県立農大を卒業した次男、雇用は短大と酪大卒の男女共に23才、15年に善一の嫁も加わり、若者5人と共に7名で(有)中山農場を営むようになり、大変喜んでいる昨今です。

13.6haの造成地へ親子5人で入植して21年目となり、成牛150頭、育成50頭飼養し、生乳1270 t 出荷している状況です。経営の特徴は開拓地へ入植したこと、90%以上借入金ではじめた事、育成牛が平成11年まではいなかった事等ですが、もう一点はずば抜けている技術は何も無いこと、例えば乳質、乳量、牧草の収量、共進会にも出場していない、堆肥処理技術等どれを見ても中程度以下である。けれども総合的に見ると誰にも負けたくない気持ちは強く持っている。小生も努力を惜しまずに来た分、後継者に対しても自然と難しい顔で接することが多くなる。欲求や望みを親や社長に要求しがちになるものだが、その願いを自分の力で実現しなさいと言っている。その努力をする中で社長の助けが必要なときは、出来る範囲で協力することになっている。一方、研修生や従業員に対しても、一見楽しそうでも厳しい姿勢を示している。研修生が来られ、二言程開口一番に言うが、その一つが「学校の先生と違って何も言わないので、聞きたい事はいつでも言って下さい。」である。言われ過ぎもやっかいだが言われぬのもつまらないし、反面、これ程厳しい事は無いと思う。農場内の目立つところへ看板を掛けているが「プロとは教える意志の無い人から、どう学ぶかである。」と、これを良い事に横着をしているが、気持ちがこちらを向いた時に初めて助言の効果が大きくなると思う。

しからは、小生の酪大在学中はどうであったか関心の向きもあろうと思う。ことに前期は、おとなしい性格なので自信が無いやら、恥ずかしいやらで、先生の指導されるまま、他の生徒のなすがままに合わせて、常に受動的な行動をとっていた。先生からは頼りない生徒として映っていたに違いないと思う。例えば初めてパーラーに入った日に、自信の無さと几帳面さと、失敗してはいけないと思う余り、先生の説明だけでは呑み込めず、作業手順をメモ書きして持っていたのを、先生に気付かれ、「覚えなさい」と言われた。又、ジャージーの保護室で手搾りする牛が居たが、初体験でしかも極めてシブイ牛で、蹴ることが多いため、あせ



寺本さん(40期生)のお別れ夕食会

る気持ちで懸命に摔ろうとするのだが、時間をかけている割には、一向に溜まらないバケツの中を、弱々しい摔り方を見て先生から怒鳴られた。滅多に叱られた事のなかった小生、ショックは今も忘れる事は無い。

今、我社での研修生は、毎年酪大生やその他で3～4組位あるが、仕事の様子を見るにつけ、小生の35年前を見ているようで、もっとしっかりしなさいとはとても言えない。総じて小生よりも積極的であり、大人びて見える生徒さんの方が多いように思う。背伸びしないで、しっかりと地に足を付け、自分らしさと個性を守り生かしてもらいたい。相撲でも土俵際で負ける人は背伸びをし、戦う人は足をしっかりと踏ん張り、頭を低く、姿勢を低くしています。やはり20代は20代らしく、30代40代と、その年相応のやるべき事、あるべき姿に努力していれば相応の結果がついて来るものだと、今改めて思っている。従って学生時代はそれらしくあることが大事で、妙に大人びていたり、プロと見違う程にできなくても、素直さと謙虚さと恥じらいがある方が成長するための基本と思う。

酪大生を受け入れて

岡山県岡山市

CITYFARM 松崎 まり子



中国四国酪農大学校、開学40周年おめでとうございます。心よりおよろこび申し上げます。

夫（隆5期生）、長男、長女（範之・亜紀共に28期生）として我が家では3名がお世話になりました。密度の濃い酪農の知識を学ばせていただき、夫は家の事情で叶わなかつたものの、息子たち2人は研修で各地で受け入れをしていただきました。

研修生としての経験は、今尚2人の心にしっかりと根ざしていて、受入農家への感謝を新たにすると共に、いつか恩返しをしたいと思っておりました。

我が家に初めて研修生を受け入れしたのは平成11年のこと。他人を2ヶ月あずかることに、牧場ファンクラブでの子供たちとの交流がおおいに役立つようになっていたのです。以来、おあずかりした学生は十数名に及び、思い出せば1人1人の笑顔が浮かんできます。出身県も岡山、兵庫、奈良、山口、熊本、長崎と広がりました。

緊張した様子でやってくる研修生も、日を追うごとに作業を覚え、家族にも慣れ、笑顔が続くようになります。時には失敗も生ずるのですが、何とか2ヶ月近くを頑張りぬいて巣立ってゆきました。目を閉じれば、受け入れた研修生たちの顔が懐かしく浮かんできます。リュウマチにかかった夫を気遣って、早々に先の研修生からかけつけてくれた子もいます。

実家が酪農家の子は、我が家の牛を連れて帰りました。ていねいに愛情いっぱい育ててもらって、納得の行く牛に成長している様子を聞くととても嬉しくなるのです。

農家・非農家は別として、他人の釜の飯を食べることは、その後の人間としての成長に大きな力となることと思います。とても有意義な制度であると信じています。

ただ、最近思うことが1つあります。これは酪大生に限ったことではありません。人と人との結び付きが以前に比べたらずい分希薄になってしまったと思うのです。

研修生の親と挨拶を交わしたのは昔の話、今は研修の始まりにも終わりにも親と挨拶を交わすことは皆無となりました。世の中の流れが淋しくなったんだと自分に言い聞かせています。

後継者の研修受入には夫も息子も、もちろん私も、立派な後継者になるように祈りにも似た思いで接するのです。私たちの持てるすべての知識や知恵を注いでいます。各地で地に足をつけた経営を展開して欲しいと願うのです。風の便りに彼らが元気でこの業界でがんばってくれていることを知る時、心より応援の拍手を送るものです。

37年前、父に「酪大を受けてみたら」と勧められたこともあった私です。夫や子供たちの酪大生活を羨ましく思います。酪農が存続する限り受入希望の学生がいる限り、受け止め農家でありたいと思っています。

校外講師一覧表

氏 名	講 義 科 目	講 義 期 間	所 属
永 友 繁 雄	農業経営学	昭和41年	岡山大学
福 田 稔	農業経営学	昭和41年～45年	岡山大学
米 田 茂 男	土壌学	昭和41年～43年	岡山大学
		昭和46年～47年	
小 松 伊三郎	育種学	昭和41年～45年	岡山大学
今 村 経 明	乳学・畜産製品製造学	昭和41年～42年	岡山大学
須 藤 浩	飼料学	昭和41年～48年	岡山大学
下 瀬 昇	肥料学	昭和41年～47年	岡山大学
		平成元年	
三 秋 尚	飼料学	昭和41年～47年	岡山大学
田 口 鎮 雄	農業経営学	昭和41年～44年	岡山大学
目 瀬 守 男	農業経営学	昭和42年～平成9年	岡山大学
中 江 利 孝	乳学・乳製品製造学	昭和43年～63年	岡山大学
江 崎 利 夫	肥料学	昭和44年～60年	岡山大学
羽 淵 統 治	農業経営学	昭和44年	岡山大学
河 内 知 道	土壌学	昭和44年～61年	岡山大学
内 田 仙 二	飼料学	昭和49年～62年	岡山大学
森 次 益 三	肥料学	昭和50年	岡山大学
尾 崎 毅	農業土木	昭和51年～58年	職業訓練校
稲 本 志 良	農業経営学	昭和53年～56年	岡山大学
片 岡 啓	畜産製造学	昭和53年～63年	岡山大学
石 原 昂	酪農機械学	昭和54年～63年	鳥取大学
佐 藤 豊	農業経済学	昭和57年～現在	岡山大学
谷 本 英	農業土木	昭和59年	職業訓練校
三 宅 靖 人	肥料学・土壌学	昭和61年～63年	岡山大学
		平成3年～4年	岡山大学
福 井 清 一	農業経済学	昭和61年～62年	岡山大学
尾 崎 英 照	酪農施設学	昭和62年～現在	鳥取大学
木 本 英 拓	土壌学	昭和63年～平成3年	岡山県農業試験場
宮 本 正 美	乳学	平成元年～現在	岡山大学
岩 崎 正 次	酪農機械学	平成元年～現在	鳥取大学
関 谷 三 郎	肥料学	平成2年	岡山大学
南 原 三 輝	肢蹄の解剖・整理・病理	平成2年～平成12年	鳥取大学
吉 原 輝 夫	牛削蹄学	平成2年～現在	認定装削蹄師
森 次 益 三	肥料学・土壌学	平成5年～8年	香川大学
景 山 詳 弘	肥料学・土壌学	平成9年～10年	岡山大学
星 野 敏 功	農業経営学	平成10年～13年	岡山大学
横 溝 功 信	畜産情報処理学	平成10年～現在	岡山大学
小 松 泰 信	農業経営学・農業経済学	平成11年～現在	岡山大学
舟 橋 弘 晃	A I・E T演習	平成11年～現在	岡山大学
毛 利 健 太	酪農機械学	平成12年～13年	岡山大学
古 川 陽 一	畜産環境保全	平成12年	岡山県総合畜産センター
沖 和 生 禧	土壌学	平成12年～15年	岡山県農業総合センター
坂 本 定 和	土壌学	平成12年	岡山県農業総合センター
佐 藤 和 久	肥料学	平成12年～14年	岡山県農業総合センター
栗 木 隆 吉	乳・肉加工実習	平成12年～現在	岡山県総合畜産センター
岡 本 芳 晴	牛肢蹄学	平成13年～現在	鳥取大学
白 石 誠 尚	畜産環境保全	平成14年～現在	岡山県総合畜産センター
藤 井 博 尚	肥料学	平成15年～現在	岡山県農業総合センター
石 橋 英 二	土壌学	平成16年～現在	岡山県農業試験場
脇 本 進 行	畜産環境保全	平成16年～現在	岡山県総合畜産センター

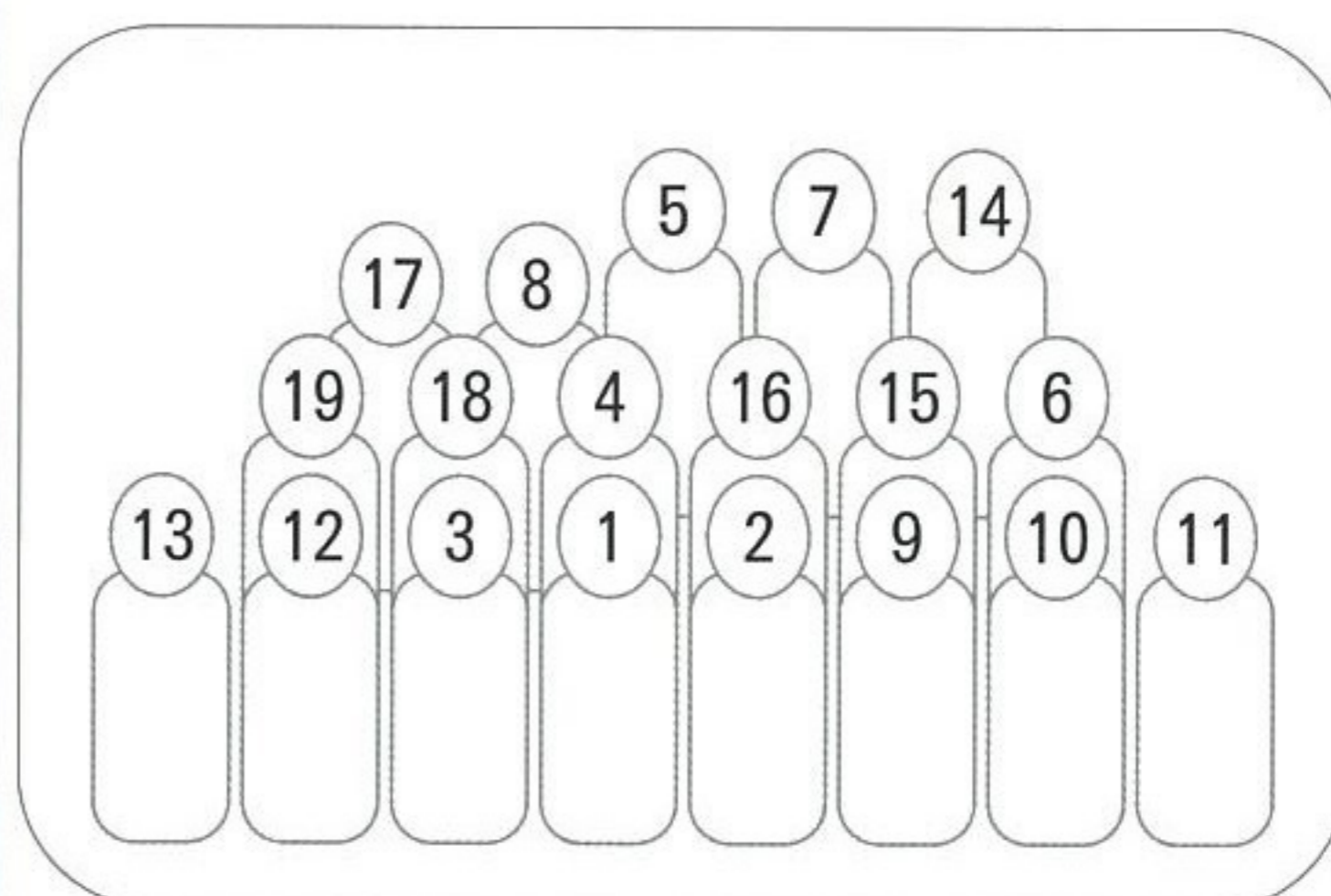
学科目担当講師名簿 (平成17年度)

講座名	科目名	講師氏名	職名
酪農経済学	農業経済学	佐藤 豊信	岡山大学教授
	畜産物流通論	有富 敬典	(財)中国四国酪農大学校校長
	畜産概論	西家 純一	(財)中国四国酪農大学校副校長
	農業簿記Ⅰ	新免 眞哲	(財)中国四国酪農大学校総務課長
	農業簿記Ⅱ	新免 眞哲	(財)中国四国酪農大学校総務課長
有富 英美		(財)中国四国酪農大学校主事	
酪農経営学	農業経営学	小松 泰信	岡山大学教授
	酪農経営	西 淳子	(財)中国四国酪農大学校主任
酪農経営診断演習			
飼料学	飼料学	溝口 泰正	(財)中国四国酪農大学校技師
	牧草草地	芦田 草太	(財)中国四国酪農大学校技師
	飼料作物	岡田 英樹	(財)中国四国酪農大学校第一牧場長
	飼料計算演習Ⅰ	芦田 草太	(財)中国四国酪農大学校技師
	飼料計算演習Ⅱ		
牧草飼料作物演習	樋口 照夫 磯田 博 芦田 草太	(財)中国四国酪農大学校技師 (財)中国四国酪農大学校技師 (財)中国四国酪農大学校技師	
家畜繁殖学	家畜改良Ⅰ	池田 良弘 長綱 則之	(財)中国四国酪農大学校技師 (財)中国四国酪農大学校技師
	家畜改良Ⅱ	長綱 則之	(財)中国四国酪農大学校技師
	家畜繁殖Ⅰ	坂部 吉彦	(財)中国四国酪農大学校第2牧場長
	家畜繁殖Ⅱ		
	助産技術演習		
家畜人工授精・受精卵移植演習	舟橋 弘晃	岡山大学教授	
家畜飼養管理学	飼養管理Ⅰ	岡崎 奈々	(財)中国四国酪農大学校技師
	飼養管理Ⅱ		
	肉用牛管理	磯田 博 平本 圭二	(財)中国四国酪農大学校技師 岡山県総合畜産センター専門研究員
	飼養管理演習	樋口 照夫 磯田 博 池田 良弘	(財)中国四国酪農大学校技師 (財)中国四国酪農大学校技師 (財)中国四国酪農大学校技師
	搾乳理論	山田 徹夫	(財)中国四国酪農大学校経営課長
畜産環境学	畜産環境保全	有富 敬典 白石 誠 脇本 進行	(財)中国四国酪農大学校校長 岡山県総合畜産センター研究員 岡山県総合畜産センター研究員
	検査演習	西 淳子	(財)中国四国酪農大学校主任
	土壌学	石橋 英二	岡山県農業試験場化学研究室長
	肥料学	藤井 博尚	岡山県農業総合センター主幹

講座名	科目名	講師氏名	職名
家畜生理 衛生学	家畜衛生	西 淳子	(財)中国四国酪農大学校主任
	解剖生理	山田 徹夫	(財)中国四国酪農大学校経営課長
畜産物 利用学	乳学	宮本 拓	岡山大学教授
	乳肉製品製造演習	栗木 隆吉	岡山県総合畜産センター経営開発部長
畜産情報 処理学	畜産情報処理	横溝 功	岡山大学教授
	情報処理演習	岡田 英樹	(財)中国四国酪農大学校第一牧場長
削蹄学	牛肢蹄学	岡本 芳晴	鳥取大学教授
	牛削蹄演習	吉原 輝夫 樋口 照夫	岡山県装削蹄師会 (財)中国四国酪農大学校技師
酪農機械 施設学	酪農施設学	尾崎 繁	鳥取大学名誉教授
	酪農機械学	岩崎 正美	鳥取大学教授
	酪農機械演習	樋口 照夫	(財)中国四国酪農大学校技師
		磯田 博	(財)中国四国酪農大学校技師
		池田 良弘 長綱 則之	(財)中国四国酪農大学校技師 (財)中国四国酪農大学校技師
酪農機械整備演習	MSK農業機械・本多製作所		
特別研究 卒業論文等	特別研究	酪大職員	
	卒業論文	酪大職員	
	一般教養	有富教授・校外講師	
酪農実習	酪農実習	酪大職員	
	校内研修	酪大職員	
	校外研修	全国先進農家	

◆ 現 職 員

氏 名	勤 務 期 間	職 名	現 住 所	写真
有富 敬典	S53. 4～S54. 3	第二牧場主任		1
	S54. 3～S57. 3	教務課長		
	H 6. 4～H 8. 3	次 長		
	H17. 4～現 在	校 長		
西家 純一	H16. 4～現 在	副校長		2
新免 真哲	H15. 4～現 在	総務課長		3
有富 英美	H12. 3～H16. 3	総務課臨時		4
	H16. 4～現 在	総務課主事		
西 淳子	H16. 4～H17. 3	教務課技師		5
	H17. 4～現 在	教務課主任		
溝口 泰正	H14. 4～H17. 3	第二牧場技師		6
	H17. 4～現 在	教務課技師		
池田 良弘	H11. 4～現 在	教務課技師		7
講元 勝代	H 9.10～現 在	調理技術員		8
山田 徹夫	H 4. 4～H 5. 3	第二牧場技師		9
	H 5. 4～H10. 3	第二牧場長		
	H15. 4～H17. 3	経営課長兼第一牧場長		
	H17. 4～現 在	経営課長		
岡田 英樹	H14. 4～H15. 3	第二牧場長		10
	H15. 4～H16. 3	教務課技師		
	H16. 4～H17. 3	教務課主任		
	H17. 4～現 在	第一牧場長		
樋口 照夫	S55. 4～現 在	第一牧場技師		11
坂部 吉彦	H15. 4～現 在	第二牧場長		12
磯田 博	H51. 4～現 在	第二牧場技師		13
芦田 草太	H13. 4～H17. 3	第一牧場技師		14
	H17. 4～現 在	第二牧場技師		
長綱 則之	H14. 4～現 在	第二牧場技師		15
岡崎 奈々	H17.11～現 在	第二牧場技師		16
石原 峯子	H12. 1～現 在	調理臨時		17
谷口 育子	H15. 4～現 在	調理臨時		18
法花千恵美	H16. 4～現 在	総務課臨時		19



財団法人中国四国酪農大 出身県別卒業生及び在校生数

設 立 区 分	県立時代	財 団 法 人 中 国 四 国 酪 農 大 学 校																				酪財 農団 大法 計人	総 計	在 校 生		
		36 ～ 39 元年	40 ～ 元	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	40	41			計		
期別	1 ～ 4	1 ～ 23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	計	40	41	計				
兵 庫		58 (2)	2	3	2 (1)	4	5	1	1		6 (2)	5 (1)	2	2	3 (1)	3 (1)	4 (1)	2 (2)	103 (11)	103 (11)	3 (1)	6	9 (1)			
鳥 取	3	20 (5)			1	1	2 (1)	2		1	1		1					1 (1)	30 (7)	33 (7)			0 0			
島 根	1	51 (9)	1	1	1		2 (1)	2	6 (2)	1 (1)	1	1		6 (2)	3 (3)	1 (1)	2 (1)	1	80 (20)	81 (20)	2 (2)	1	3 (2)			
岡 山	74	310 (34)	7 (2)	7 (2)	2	6 (1)	7 (3)	7 (3)	5 (2)	7 (1)	6 (1)	10 (2)	9 (2)	6 (3)	3 (2)	9 (3)	4	10 (3)	415 (64)	489 (64)	3	11 (4)	14 (4)			
広 島	1	44 (7)	2		2	2	2	8 (2)	1 (1)		3	1	1	2 (2)	1 (1)	1	3 (1)	2	75 (14)	76 (14)		3 (2)	3 (2)			
山 口		24 (1)	1				2 (1)	1 (1)	3 (2)	3 (1)	1 (1)		3 (2)	1	2 (2)	1 (1)	1 (1)	1 (1)	44 (14)	44 (14)	3	1	4 0			
徳 島		12 (1)		1							1	1 (1)						1 (1)	16 (3)	16 (3)	1		1 0			
香 川		34 (2)	1	1						1	1	1					1	2	1	43 (2)	43 (2)		0 0			
愛 媛		32 (2)	1	2	1			3	2 (1)	1	1	1	1 (1)		2		1		48 (4)	48 (4)	3	1	4 0			
高 知		24 (1)			1		1	1	1	3	2		1				1	1 (1)	36 (2)	36 (2)			0 0			
構 成 県 外	5	17 (3)	5	3	2	5 (1)	5 (1)	6	10 (5)	4 (3)	2 (1)	7 (1)	6 (2)	8 (2)	6 (2)	5 (3)	5 (1)	5 (2)	101 (27)	106 (27)	8 (2)	6 (2)	14 (4)			
合 計	84 0	626 (67)	20 (2)	18 (2)	12 (1)	18 (2)	26 (7)	31 (6)	29 (13)	21 (6)	25 (5)	27 (5)	24 (7)	25 (9)	20 (11)	22 (10)	23 (5)	24 (10)	991 (168)	1,075 (168)	23 (5)	29 (8)	52 (13)			

(注) 下段 () 内は女子で内数とする。

(財) 中国四国酪農大 卒業生の進路状況

区 分		酪農等後継者		畜産関係団体等		そ の 他		計	
卒業年度	期 別	人 数	内岡山県	人 数	内岡山県	人 数	内岡山県	人 数	内岡山県
県 立		18	18	5	5	61	61	84	84
41~50	1~10	178	112	67	35	77	23	322	170
51	11	26	14			5	1	31	15
52	12	22	13	1		9	2	32	15
53	13	12	5	4	3	11	2	27	10
54	14	22	10	4	3	6	1	32	14
55	15	28	17	6	3	4	1	38	21
56	16	13	7	4	2	1		18	9
57	17	22	11	6	3	3	2	31	16
58	18	13	7	2	1	1		16	8
59	19	11	3	3	1			14	4
60	20	10	3	1	1	1		12	4
61	21	11	5	5	2	2	1	18	8
62	22	13	7	1		3		17	7
63	23	14	5	4	4			18	9
H 1	24	10	4	7	1	3	2	20	7
2	25	12	5	5	2	1		18	7
3	26	8	2			4		12	2
4	27	8	5	3	1	7		18	6
5	28	12	4	13	3	1		26	7
6	29	11	1	11	5	9	1	31	7
7	30	7	1	15	2	7	2	29	5
8	31	6	2	12	5	3		21	7
9	32	14	1	6	2	5	3	25	6
10	33	8	3	16	7	3		27	10
11	34	9	4	14	5	1		24	9
12	35	8	3	16	3	1		25	6
13	36	5	1	12	2	3		20	3
14	37	4	2	12	4	6	3	22	9
15	38	13	2	10	2			23	4
16	39	5	3	19	7			24	10
総 計		553	280	284	114	238	105	1,075	499
割 合 %		51%	56%	26%	23%	22%	21%	100%	100%
近年 5 年		35	11	69	18	10	3	114	32
割 合 %		31%	34%	61%	56%	9%	7%	100%	100%

編 集 後 記

財団法人中国四国酪農大学校創立40周年の節目にあたり「40年のあゆみ」を発刊いたしました。

長年に亘る関係者の皆様方のご支援ご指導によりまして、ここに栄えある40周年を迎えることができましたことを厚くお礼申し上げます。

また、今回の発刊にあたりご祝辞をいただいた関係者の方々を始め、原稿及び写真をいただきました皆様方にはご多忙のおり大変ご無理をお願いしましたことに対し深甚なる謝意を表する次第です。

とくに今回は酪農大学校と酪農大学校同窓会の共同発刊でもあり、多くの卒業生の方々からも日々のお忙しい中で執筆されました原稿を頂戴いたしましたことに改めて厚くお礼を申し上げます。

全国各地で活躍されております卒業生の皆様方の様子を目の当たりにし、編集に携わりましたものといたしまして何よりの喜びを感じたところであります。

今回、発刊いたしました40周年記念の本誌を通じまして関係者の皆様、卒業生の皆様の絆がより深まり各位の親交がますます深まりますよう祈念するものであります。

今後とも、財団法人中国四国酪農大学校の発展に対しまして末永いご指導ご援助を賜りますようお願いするとともに、皆様方のご健勝をお祈りいたします。

財団法人中国四国酪農大学校創立40周年記念

40年のあゆみ

印刷発刊 平成18年 3月
編集発刊 岡山県真庭市西茅部 6 3 2
財団法人中国四国酪農大学校
財団法人中国四国酪農大学校同窓会
電 話 0867-66-3651
F A X 0867-66-3652
印 刷 岡山県津山市高野山西2115-15
株式会社 三 勝
電 話 0868-26-6262